

## 第一章 美しい自然

### 第一節 概説

日本民族は多数民族の混血によってできたといわれている。中国の東北地域や朝鮮半島を経由して渡来してきたツングース族と、南支那、印度支那方面からきた苗族、さらには南洋諸島から移ってきたインドネシア族などが、数千、万年の永い間にわたり血を混じえ、淘汰たうたされて生まれた民族といわれ、その住みついた環境風土によって、また混血の濃淡によって、容ぼう、言語（方言）、性格、習慣など異なるものが生じてきたといわれている。

なかでも松浦地域の民族は、大陸にいちばん近い位置にあつたため、大陸の血にいちばん影響されただろうし、それに対馬暖流に乗ってきた南方の血も混じり合つてきたとみてよい。日本民族創造の太古の時代から、近代に至るまで、大陸との間に繰り広げられてきたさまざまな交渉が、この松浦の地域民に対しては他の地域民よりいっそう、大陸の血を注ぎ込んで濃くしていったことだろう。

松浦民族と朝鮮半島南部の韓民族とは、同種であると大部分の学者は認めている。このことは同一質の石器を

使い、土器文様も同じくしていたことから説明されている。また松浦の地を舞台にした神功皇后伝説や十一世紀ごろから発生したと伝えられる松浦党の活躍話の陰にも当然に民族の交流があっただろうし、それらがやがてそれぞれの地に定着していったとみてよい。松浦人は異民族に対しては排他的偏見がなく、よく外来者を抱擁し同化していく特性があったと思われ、それが独自の栄枯盛衰の歴史をつくっていった。

われら現在の町民は、これら遠い先祖の残した栄枯盛衰の歴史を滋養として人生生活を送っている。この歴史を知ること、美しい松浦の自然、玄海町の自然をさらに美しく感ずることになるだろう。

## 第二節 地名の起こり

大きく広がる青い空。東支那海へ続く玄海の碧い海。そして、暖地性植物が森をつくり農作物をつくって、ゆるやかに起伏する緑の上場台地。

そこには幾千、万年の昔から、われらの先祖を育ててきた生活の場があった。先祖たちは天災地変に泣き、春夏秋冬、悲喜こもごも、われらまでその血を伝えてきた。たゆまぬ生活の努力があった。

そしてその生活の必要性から、生活環境のなかの土地、海洋、河川などに、それらを示す符号としての地名をつけていった。その発生の時期は文字の発生よりはるかに古いと思われ、その起源を証明することは難しいが、大陸との関係の深さを証明するかのよう、この松浦の地にはそれと思われそうな地名が多くあるのも特色といつてよい。

我らの郷土は空も海も陸も、新鮮はつらつとした緑に包まれている。さらに将来に向けて大きく発展していかなければならない。地名もまた新たな躍進への過程のなかで、必要に応じて変化し生滅していくことだろう。あたたかも三十年前、町村合併で「玄海町」の町名が新たに生まれたように。

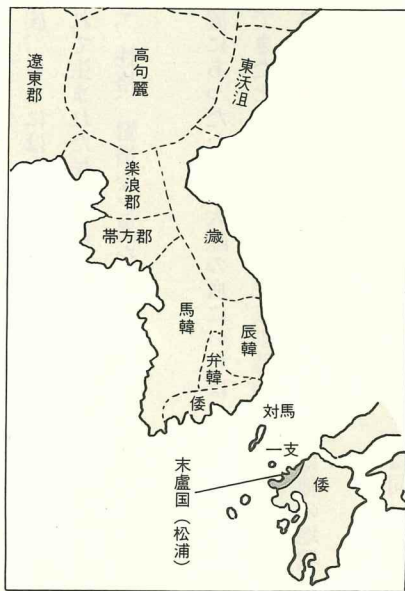
それではまず、われわれ日本民族が住む日本国の国名の起こりから入ってみよう。

### 第一項 日本国名

#### 日本国の領土

アジア大陸の東、太平洋の西辺に弧状に展開するのが我ら日本人が住む日本列島。第二次世界大戦後、象徴としての天皇を持つ主権在民の単一民族の国、これが日本国である。

国土の広さは本州を最大に北海道、九州、四国、沖縄諸島の順で構成され、総面積は三七万七八〇一・一四平方\*（昭和六〇年一〇月一日国勢調査）。ここに日本政府の行政権が行使されている。山地の起伏が多く、総体的に居住、耕作に適する土地が少なく、日本アルプスの三、〇〇〇以上の山脈や一、〇〇〇以上の内外の山がいたるところ



三世紀ごろの朝鮮半島と末盧国（『邪馬台国新考』風涛社より）

ろに多い島国である。

明治以前は江戸時代の鎖国政策のせいもあって、西南諸島と北海道の領有が認められていただけ。明治になって千島、小笠原諸島が加えられ、日清、日露の戦争で台湾、南樺太を領有。明治四十三年（一九一〇）の日韓併合により行政区画は拡大されたが、第二次世界大戦敗戦の結果、千島、小笠原諸島、台湾、南樺太、沖繩諸島が失われ、朝鮮は独立、大幅に領土は減少した。戦後、まず小笠原諸島、奄美群島、次に沖繩諸島が返還されて今日の日本の領土となったが、歯舞諸島、国後島、色丹島、択捉島の北方領土は、国民の熱い願望にもかかわらずまだ返還されていない。

昭和五十六年（一九八一）一月六日、政府は返還運動強化のため、二月七日を「北方領土の日」と決定し、同年二月七日、北海道根室・札幌両市など全国各地で記念式典を開いた。これは毎年行われている。

### 日本の国号

古代の日本人は日本列島のことを「大八洲」または「豊葦原瑞穂国」と呼び、同時に「秋津洲」とも「蜻蛉洲」とも書き、呼んでいた。あきつとはトンボのことで、西南諸島や沖繩諸島では今でもそう呼んでいる。この呼び方は『古事記』や『日本書紀』に記されている。

『日本書紀』の神武天皇のくだりに、天皇が大和（やまと）を見はらす丘の上に登って、その地形を「蜻蛉の臂（あきつ）の唇（くは）の如くなるかな」といった。「是に因りて始めて秋津洲の号有り」というとある。山々がトンボの連なっているような地形だということからであろう。

畿内の大和地方に大和王朝が成立すると、その支配権を拡大するにつれて、その地方名大和をそのまま日本の総称としていった。いっぽう、中国の文献には早くから日本の国を「倭（わ）」と記していた（『前漢書』、『魏志倭人伝』など）。大和王朝ではこの倭の字をやまとと読み「大倭」とも美称していたが、後に好字を使って倭を和に替え「大和」と書くようになった。

この後、推古天皇十五年（六〇七）小野妹子を遣隋使として送った国書に「日出処天子」または「東天皇」という字を使ったことから「日本」という国号が生まれ、これがいつしかにほんまたはにっぽんと呼ばれるようになった。

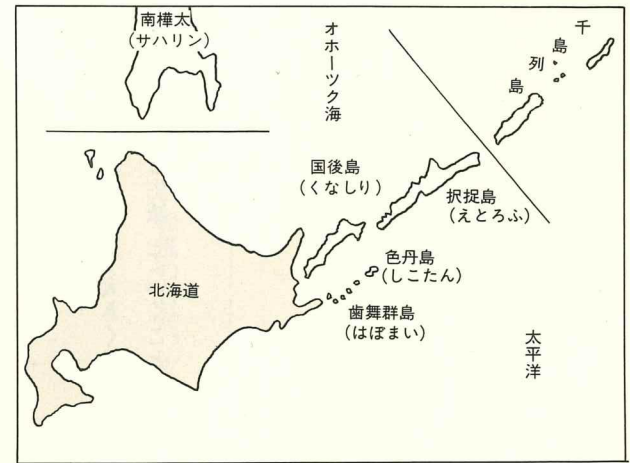
外国人は日本のことを「ジャパン」、または「ジャポン」などと呼ぶが、これは『東方見聞録』を書いたマルコポーロが漢音を写したものがジャパン、オランダ人が呉音を写したのがジャポンとなったとされている。

注 東方見聞録「マルコポーロが東洋諸国を旅行した折（二二七―九五）、見聞したことを筆記させたもの。日本を「ジパンク」の名で紹介している。

### 国旗・日の丸

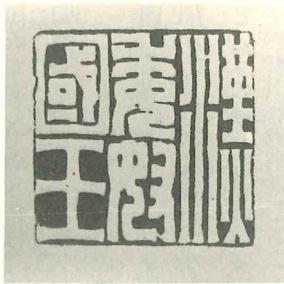
「日の丸」は明治新政府が明治三年（二八七〇）一月二十七日、太政官布告第五七号で国旗と制定した。日章旗ともよばれ、太陽をかたどったものである。

天照大神を日神として崇拜し、日本の国を「日出ずるところ」と称した日本民族は、早くから日の丸に特別な感情を持っていた。武田信玄、上杉謙信などの戦国武将は日の丸を旗印に用い、豊臣秀吉は朝鮮役のおり、日の

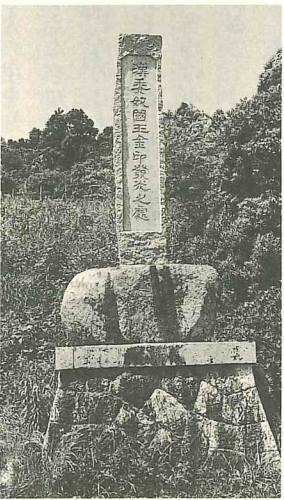


北方領土図





漢委奴国王の金印



「漢委奴国王金印発光之处」の碑 (福岡市志賀島)

兼ねて国内を巡り民情を観察した。

八代郡白髪山に到ったとき、日が暮れて山中に宿した。その夜虚空に火が見え、自然の標となつてこの山に落ちた。燎火のようであった。健緒組はこれを見て驚き怪しみて、朝廷に参上、奏して言うには、臣かたじけなくも聖命を被り、遠く西戎を誅するも刀刃をぬらさず、梟賊は自滅した。これは天皇の御威光によるものでなくて何であろう。さらに燎火の状況を奏上した。天皇は勅して曰く、奏上したことはいまだ聞いたことがない。火の下りた国、火国と謂うべし」と。すなわち健緒組の勲功を賞して姓名を賜い、火君健緒純と曰れ、この国を治めさせ、火国と曰れた。後に両国に分かれて前、後の国(肥前、肥後)となった。

また第十二代景行天皇の御代(七一―二三〇)、球磨贈(熊襲)を誅して筑紫国(九州の古称)を巡視の時、葦北の火流浦(熊本県日奈久か)から船を発して火国に幸された。海を渡る間に日が没し、夜冥くして船着き場がわからなかった。たちまち火の光があつて、遙かに行き先が視えた。天皇は棹人(船頭)に勅して火の所を指した。勅に応じて行ったところ、果たして崖に着くことが出来た。天皇は詔りを下して曰れるには、何という邑か―と。

丸を船印に用いさせたという。江戸幕府も船印に用いた。また諸藩に対し異国船と間違えないよう、嘉永七年(一八五四)七月十一日、日の丸を日本の総船印として用いるよう布告させた。

第二次世界大戦後、連合軍命令で日の丸の掲揚は禁止されたが、昭和二十四年(一九四九)一月一日から再び国民が自由に好きな場所に掲揚できるようになった。

単純で明快な国旗・日の丸は、日本民族の限らない発展への象徴でもある。

## 第二項 肥前国名

国名、地名がいつごろからできたかは、はっきりしない。われらの郷土は今、佐賀県東松浦郡玄海町と呼ぶ行政単位のなかにある。全国三千二百五十三市町村(昭和六〇年一月一日国勢調査)のなかの一つだ。古くは肥前国・松浦郡のなかの、名もない集落であつたことだろう。

### 肥前国名の誕生

肥前国、古くは「ひのみちのくちのくに」とよぶ。

日本の史書として最も古いとされる『古事記』がつくられた翌年の元明天皇和銅六年(七一三)、諸国の郡郷名に好字を用い―と詔して、編集された『風土記』というのがある。このうちの『肥前風土記』のなかに、肥前国の地名と松浦郡の地名の起りなどが書いてある。肥前国に関しては、

「肥前国はもと肥後国と合して一国であつた。昔、第十代崇神天皇の御代(紀元前九七―)に、肥後国益城郡朝来名峰に土蜘蛛(土賊)の打猿、頸猿の二人がいて、徒衆百八十余人を帥いて良民を脅かし、皇命を拒みて降伏せず、朝廷は勅して肥君が祖健緒組を遣わしてこれを伐たせた。ここで健緒組は勅を奉じて、ことごとくこれを滅ぼし、



国人が奏していうには、ここは火国八代郡火邑なり。ただし火の主を知らずと。干時、天皇は群臣に詔りして曰れるには、今この燎火は人の火ではない。火国と号するゆえんを知ることが出来た」と。

このようにして火の国の名ができたのである。ちょうどこのころの日本は、弥生式文化の中期にあたる時代。中国の史書によると、百余国の小国家が分立していた。西暦五七年には、倭の奴国王が後漢の光武帝に使者を送り、有名な「漢委奴国王」の金印を受けている。倭というのは、当時の中国が呼んでいた総称的な日本の国名。奴国というのは、現在の博多湾付近にあった小国と考えられている。

崇神、景行両天皇のこの火の国呼称の記事は、したがって多分に伝説的の説話だが、有明海に続く不知火海(八代海)の名も、この伝説に基づいてできたというわけか。ともあれ、火の国の地名はこの伝説よりも、何万年の前から火を吹く活火山として有名な、阿蘇山噴火の火柱から生まれていたのではなからうか。もちろん現代でも、八代海には夏、蜃気楼様の火は見えるのだが。なお有明海にも文化のころ(一八〇四)から、不知火が現われたという伝えもある。

火の国が肥前肥後の「肥」の字になったのは、前掲のように「好字を用い」ということから使われたのだらうが、肥前国と肥後国に分轄されたことについては『肥前風土記』には「後に両つの国に分かれて前と後とになせり」とあるだけで、その時期を明らかにしていない。しかし他の例からみて、第三十六代孝徳天皇朝(六四五―六五四)時代ではあるまいかとされている。(『佐賀県史』上巻)

#### 肥前国の移り変わり

『肥前風土記』は書きだしに、郡十一カ所(郷七〇、里一八七)、駅十八カ所、烽二十カ所、城一カ所、寺二カ所と記し、次に前記の肥前国の生い立ちにまつわる説話を書いてあるが、これが書かれたころはすでに、中央政府の大和王朝政権が、肥前国にも確固とした政治をしていたことがうかが

える。白村江の戦い(天智天皇二年=六六三)に敗れた大和王朝は新羅軍の来攻を恐れて、この肥前国に重点的に、とぶひのろし(漢字で烽・烽火・狼火・狼煙とも書く)と官道をつくった。なかでも松浦郡内がもつとも多く記されている。

さらに行政区分けとして、基肄郡、養父郡、三根郡、神埼郡、佐嘉郡、小城郡、松浦郡、杵島郡、藤津郡、彼杵郡、高来郡を置き、郡名の由来や伝説、生業などが記され、景行天皇ご巡幸の説話も書かれている。

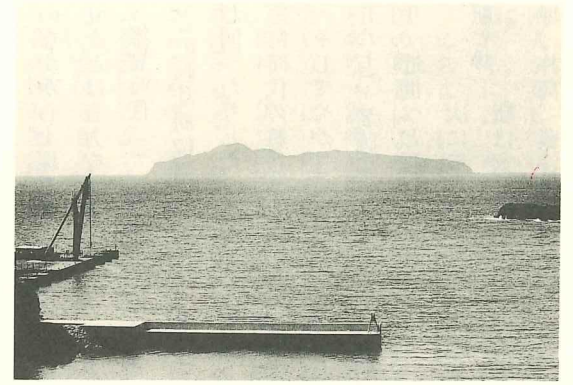
平安時代(七九四)になると律令制度もゆるみ、貴族や社寺、豪族たちは荘園をつくって土地を私有化し、そのなかから土地を守るための武士団が誕生していった。三根郡には綾部氏、佐嘉郡には高来氏、松浦地方の松浦党などには有力な武士団であった。刀伊賊入寇の時(寛仁三年=一〇一九)には、すでに松浦武士団の活躍があった。

鎌倉時代(一一九二)になると武士団は幕府の御家人となり、南北朝時代(一二三三―一三三六)、室町時代(一三三六―一五七三)の動乱期には松浦党は、ときには南朝方、ときには北朝方となって戦ったり、和寇と称されて大陸沿岸を荒らし回ったりした。また小城郡を中心に勢力のあった千葉氏と藤津郡地方に勢力のあった大村氏との争いも生じた。室町時代の終わりごろには、竜造寺隆信が今山の戦いで大友宗麟を破り、五州二島の太守となった。

そしてやがて戦国時代も足利幕府の滅亡(一五七三)で、安土桃山時代となり、秀吉の島津討伐(天正一五年=一五八七)、名護屋城を本営にした朝鮮出兵(文禄元年―慶長三年=一五九二―九八)などで肥前国の様相が大きく変わり、近世へと移行していった。

次に参考までに、『肥前風土記』の最初に書かれた駅と烽について記しておこう。

駅と烽 駅は大和王朝が対大陸関係の交通路として造った官道に十八カ所置いた。基肄、三根、神埼、佐嘉、小城、杵島、藤津の各郡内に一カ所ずつ、彼杵郡内に二カ所、高来郡に四カ所、松浦郡には五カ所の計十八カ所。



馬渡島（鎮西町）の遠望（外津橋から写す）

これが延喜式（延長五年編＝九二七）になると十五カ所に減っていて、その場所は基肆、切山、佐嘉、高来、磐氷、大村、賀周、逢賀、登望、杵島、塩田、新分、船越、山田、野鳥とはつきり地名を書いてある。松浦郡の駅五カ所は、磐氷＝唐津市石志に比定、大村＝浜玉町五反田、賀周＝唐津市見借、逢賀＝唐津市相賀、登望＝呼子町友地区であった。各駅には駅馬が五頭常置されていた。

烽は見通しのよい山や丘を選んで約四十里（大和王朝時代の里数、約二一・六）ごとに設けられ、外敵の来襲、夷賊の反乱、外国使節の来航をいち早く知らせるために昼は煙、夜は火を放って次々に大宰府へ知らせる通信手段だった。煙は艾藁、生柴を束ねていぶし、火は乾草、松明を束ねて燃やしていた。平安時代に書かれた『延喜式』によると、外国使節来航のときは一炬、外敵襲来を知らせるときは二炬、二百隻以上の軍船来襲のときは三炬を放つようになっていた。馬渡島、加部島、鏡山（以上松浦郡）、両子山（小城郡）、日隈山（神埼郡）、旭山（養父郡）、基肆城などにあったといわれている。松浦郡内には鏡山以外は確証がないと記している。しかし地理的にみても、また馬渡島に「番岳」、加部島に「日和見岳」の地名（近世の呼び名かもしれない）が残っていることからみても、両島には烽所があったと考えられそう。

なお、風土記にある城一カ所は基肆城のこと。天智天皇四年（六六五）に筑紫の大野城とともに築かれた朝鮮式

山城。また産物の記載もあり、例えば逢鹿駅の個所には鮑、螺、鯛、海藻、海松など、登望駅の個所にはこのほかに雑魚が書かれている。また陸産物では稲作のほかに、麦、粟、豆類も栽培され、養蚕も行われていた。

肥前国の政庁である肥前国府は、佐賀郡大和町久池井を中心とする一帯にあった。また当時の人口は九万人、田は一万畝ほどであったろうと推定されている。郡に郡司、里に里長をおいて政治を行った。

### 第三項 松浦の地名

#### 松浦郡の地名

『肥前風土記』は松浦郡の地名の起こりを、次のように記している。

「昔、氣長足姫尊（神功皇后）新羅を征伐せんと欲し、この郡に行きて玉嶋の小河の側にて進食す。ここにて皇后は針をまげて釣を為り、飯粒で餌を為り、裳糸で縋を為り、河の中の石の上に登って釣を捧げ祀ぎて曰く、朕は新羅を征伐し彼の財宝を求めんと欲す。その事が出来、凱旋成れば、細鱗の魚朕が釣縋を呑めんと。釣を投げてしばしして、魚を得たり、皇后曰く、甚だ希見しき物なり（希見を梅豆羅志と謂う）因って希見国と曰うと。今訛つて松浦郡と謂う。このゆえんで、この国の婦女は、孟夏四月、常に針で年魚を釣る…」と。

さらに『日本書紀』（元正天皇養老四年編＝七二〇）の氣長足姫尊のくだりに、

「夏四月、壬寅朔甲辰、北火前国松浦県に到りて、玉嶋里の小河の側に進食す。ここで皇后針を勾げて釣を為り粒を取りて餌にし、裳縋を抽取りて縋にして、河の中の石の上に登りて、釣を投げ祈ひて曰く、朕は西の方財国を求めんと欲す。若し事成ること有らば、河魚釣を飲えと。因って竿を挙ぐ。乃ち細鱗魚を獲たり。時に皇后曰く、希見物なり（希見、これ梅豆羅志という）故に時の人、その処を号けて、梅豆羅国と曰うと。



いま、松浦と謂うは訛れるなり」と。

全く同文同意のことが書いてあり「めづら—まつら」と地名の起こりを説明しているが、『風土記』や『書紀』より先に編集された『古事記』（元明天皇和銅五年「七二二」の仲哀天皇のくだりには「筑紫の末羅島の玉嶋の里に到り座して」と末羅と書かれている。さらに『国造本紀』および中国の『図書編』にも末羅、『魏志倭人伝』には末盧国、明国『籌海図編』の日本国図には馬子喇と記している。『国造本紀』には「末羅国造、志賀高穴穂朝御世」と書いてある。志賀高穴穂朝とは第十三代成務天皇の御代（二二二）のこと。したがって神功皇后時代より一代前の天皇の時代であり、神功皇后の事跡でまつらの国名ができたという説も、結局は伝説というものだ。しかしいずれの本も、説話の時代より後代の作のため、まつらの名称の発生時期は特定できないとしている。（『東松浦郡史』）

結局、二世紀中ごろ（一四六）の倭国（日本）の状態を記した

『魏志倭人伝』（三世紀、中国晋の史官陳寿（二三三—二九七）編の三国志の一部）の中にある「又一海を渡ること千余里、末盧国に至る。四千余戸有り」の末盧国の名は、神功皇后説話発生前の、早くから中国にも知られていた名称で紀元前からあったと考えられ、記紀の編者たちはこれを美化して、梅豆羅国としたとみてよい。

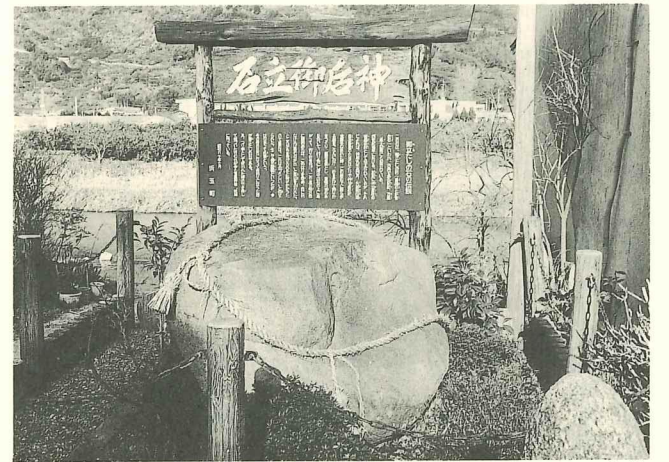
いずれにしても、まつらの語感、古代の大陸とは無縁の名ではなさそうだ。風光明媚な、西北部九州の自然にふさわしい名称ともいえる。そして南朝鮮地方の古代小国家名の伽羅、安羅、多羅、耽羅なども関連のありそうな呼称で、松浦地域内には庇羅（平戸）、田平、斑島（馬渡島）、各羅（加唐島）、大良、藤平など、ららのつく地名が多いことからその関連をうかがえる。

#### 松浦郡の分轄

松浦郡は足利幕府の時代（北朝・暦応一年「一三三八」）以来、上下の二郡に分けて上松浦、下松浦の名称が使われていた。朝鮮の有名な史料・申叔舟の『海東諸国記』には「肥前州上下松浦あり、海賊（倭寇）の拠る所」とある。上下松浦郡の時代は、唐津を上松浦郡の首邑、平戸を下松浦郡の首邑とした。明治四年（一八七二）七月十四日の廃藩置県後、伊万里県—佐賀県—三潞県—長崎県と変わり、明治十一年七月二十一日制定された郡区町村編制法によって、従来の大小区の制を廃して郡を置くこととなり、同年十月二十八日、上下の両松浦は東西南北の四郡に分けられ、明治十六年五月九日佐賀県が長崎県から分離独立の折、東西松浦は佐賀県、南北松浦は長崎県所属となった。

東西南北松浦に四分割されたことについて『西松浦郡史』には、もう少し詳しく次のように書いてある。

「古来大郡なりし松浦郡は茲に四分（郡の起源より一七四四年）されて所謂東部松浦は旧波多領即ち唐津領の中波多津、黒川、大川、南波多の四ヶ村を割き中部松浦に譲りて、其餘を以て東松浦郡とし、所謂中部松浦は此四ヶ村（波多没落後一八五年）を併せて西松浦郡とし、旧相神浦、今福以西、平戸島附近を北松浦郡とし、五島各島を南松浦郡とせしは地理及び歴史上に照し適當なる分合と謂ふ可し（但福島を本郡—西松浦郡—に附せざりしを遺憾とす）」と。



神功皇后が戦勝占いのアユを釣られたという伝説の神后御立石（垂綸石）（浜玉町五反田）

松浦に残る古歌  
神功皇后が戦勝の釣り占いをされた玉島川は伝説にあるように、古くから中央にも知られた小川だった。天平宝字三年（七五九）編集された『万葉集』には玉島川を詠んだ歌と、松浦海を詠んだ歌があるのでいくつかを記しておく。

玉島のこの川上に家はあれど

君をやさしみあらはさずありき

まつら川（玉島川のこと）河の瀬光り鮎釣ると

たたせる妹が裳の裾ぬれぬ

人皆の見たらむ松浦の多麻志末を

見ずてや我は恋つつ居らむ

多良思比売みふねはてけむ松浦の宇美

いもが待つべき月はへにつつ

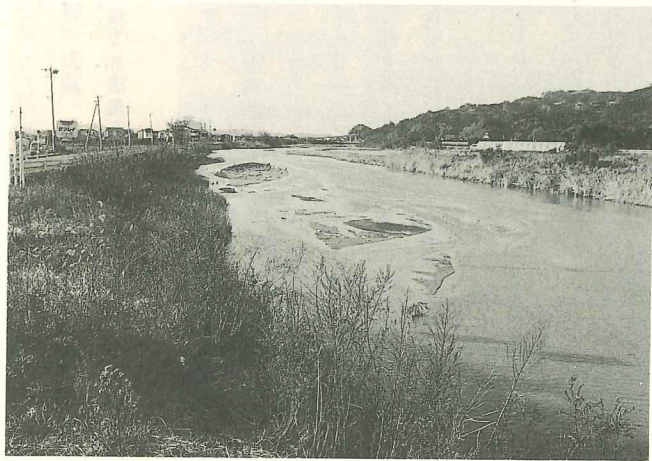
君をまつ麻都良の干良のをとめらは

とこよの国のあまおとめかも

麻都良我多佐用姫のこがひれふりし

山の名のみやさきつつをらむ

なお参考までに『万葉集』原文の歌を一つ記しておこう。



万葉歌人の歌の舞台にもなった玉島川（浜玉町）

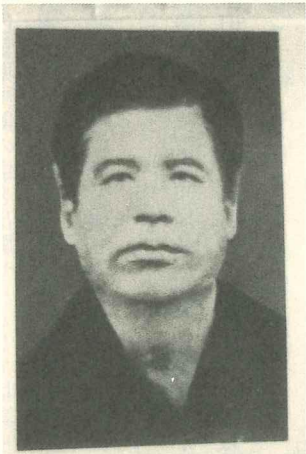
得保都必等、麻通良佐用比米、都麻胡非尔、  
比例布利之 utili、於返流夜麻能奈

#### 第四項 佐賀の地名

『肥前風土記』佐嘉郡のくだりに「昔、樟樹一株この村に生ゆ。幹秀いでて高く、莖繁茂して朝日の影、杵島郡の蒲川山を蔽い、暮日の影養父郡草横山を蔽えり。日本武尊巡幸の時、樟が茂り榮えているのをご覧になって曰く、この国を榮国と謂う可しと。因つて榮郡と曰う。後改めて佐嘉郡と号す…」と。さらに「茲において大荒田云うに、この婦是の如く実に賢女なり。故に賢女を以て国名と為さんと欲す。因つて賢女郡と曰う。今佐嘉郡と訛つて謂うなり」。このように佐賀の地名の起こりを説明している。

佐賀県の起こり  
明治四年（一八七二）七月四日の廃藩置県

後、現在の佐賀県が設置された明治十六年五月九日までの約十二年間、佐賀県は伊万里県―佐賀県―三潴県―長崎県と次々に変わった。明治九年八月二十一日長崎県になってからは、県庁が遠く生業の発展に不便として同十五年二月ごろから、佐賀県復活運動が活発化した。同年二月



佐賀県初代県令・鎌田景弼（「県警察史」より）



十四日付の西海新聞には「このごろ西海有志の士所々に集まり、佐賀県再置の儀を出願せんとして協議中なるよし…」とか、同月十六日付の同紙には「佐賀県を復すの議を決議」とあるなど、復県運動が強く進められていた。この運動に対し当時の東松浦郡（現在の唐津市を含む）は「分県は不便なる上、地方税の増加を招く」として逆に反対運動もしていたという。

初代の佐賀県令（明治一九年から知事と名称が変わる）には旧熊本藩士で司法省第四局長だった鎌田景弼が任命された。同十六年六月十九日、鎌田県令は人力車数十台を連れて、旧佐賀城北堀端にあった旧制佐賀中学校校舎の仮県庁舎に初登庁した。

### 第五項 唐津の地名

昔、第十代崇神天皇の御代（紀元前九七〇）朝鮮半島南部にあった大伽羅国から使者がきて、わが国に保護を請うた。天皇は鎮将を遣わしてこの国を治めしめ、国号を任那と改めたという。このことから外国のことをからと呼ぶようになり、からとの交通の港ということでから津（唐津）と呼ぶようになったと『松浦史』には書いてある。

唐津の文字がいつごろから用いられるようになったかは不明だが、初見として、上松浦党・波多広の正平二十三年（二二



大聖院（唐津市西寺町）の十一面観音

六八）卯月十三日付の斑島（馬渡島）に関する押書に「然りと雖も此の為去る八日唐津在自り」と記されている（『有浦文書』）。また唐津市西寺町の大聖院の聖観世音像の胎内銘に「観世音像一体、肥前国松浦西郷唐津社、本地堂本尊事」とあり、建徳二年（南朝年号「一三七二」）八月四日の奉造立の日付となっていることからみても、このころには確かに唐津の文字が使われていたことがわかる。

なお太宰府天満宮資料には「辛津」とも読める文書があり、保元の乱（保元元年「一一五六」）の少し前ごろ書かれたものだが、そうだとすると、唐津のことが文書に出てくる最初ではないかとみられている（第二編第二章第四節第二項「松浦荘」欄参照）。ただし、この辛津と読める字は一般的に「幸津」であるとされ、現在、鳥栖市内にある地名、鎌倉期から戦国期に見える荘園名ともされているので、そのことも付記しておく。

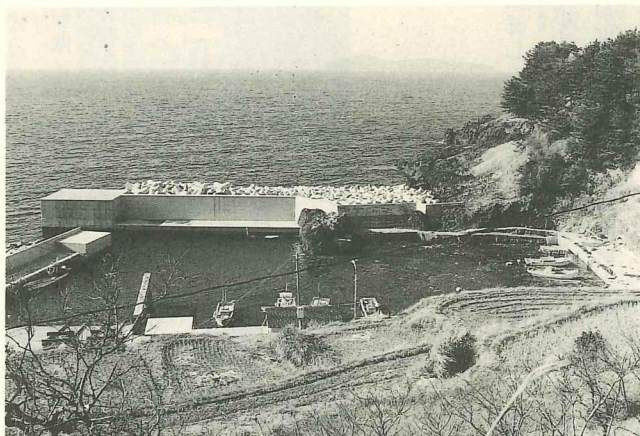
### 第六項 値賀の地名

値賀（村）の地名の起源については昭和三十三年発行の『値賀史』に詳しく解説してある。要約すると、「値賀氏の祖連（値賀十郎）が母の再婚とともに松浦党の名家・御厨の松浦直の養子となって、値嘉島（今の五島諸島）の中の小値賀島を領し、ここの地名に因って値賀氏と称し、その別家が東松浦半島のこの地に上陸して、この地方の支配権を握り、その支配者の姓がそのまま値賀の地名になったとみることが出来る」とし、「値賀神社（元村社・玄海町下宮地区）の祭神が普恩寺の海岸・池尻の松の下から上陸したとの伝承があるところからみても、この上陸はうなずける」としている。すなわち、地名（小値賀島）が姓（値賀十郎）となり、その姓が新たに地名（値賀村）となったというわけだ。

さらに値賀神社の文書には「神功皇后三韓ご親征の際、海波穏やかならざりしかば、当地池崎夫婦石浦よりご上陸あり、塩井川にてみそぎ、森の下にご休息あり、今の社地たる小丘に登り給い、西方を望み、此の地新羅の地に近しと宣い、天地神祇に戦勝のご祈願をならせられ、ちかの里(値賀の里)と称し給いと伝う」と地名の起りを伝説的に記されている。

さて総称的な値賀の地名の起源については、これも『肥前風土記』に「さらに勅して云う、この島(今の五島諸島)遠しと雖もなお近くに見るが如し、近島と謂う可し、因つて値嘉島と曰う:」とあり、また『古事記』の国生みの説話のなかには「次に知詞嶋を生みましき。亦の名は天之忍男という」ともあって、ちかの地名の起りを記している。いずれにしてもこの地名は早くからできていたとみられる。

次にわが町の値賀(村)の地名がいつごろから使われたか、その初見とみられるものに『有浦文書』がある。その中の正和二年(一三三三)□月十日付の佐志浄覚(拳)讓状案に「讓与処分状事、在肥前国松浦西郷庄値賀村、田地屋□□事」とあり、これは佐志氏源拳が子の久曾寿丸に対して、代々相伝えてきた私領の田地、家屋敷を永代に譲り与えるという書状だが、鎌倉時代(一一九二—一三三三)末期ごろはすでに使われていたことがわかる。



池尻松の下海岸(今は普恩寺集落民の船だまりになっている)

### 値賀村

値賀村とは藩政期までであった値賀六郷(普恩寺村、今村、値賀河内村、平尾村、浜浦村、枝去木村=唐津市)のこと。江戸初期に描かれた慶長絵図には「値賀」と総称的に地名が記されている。

また「唐津領惣寄高」による値賀組には今村、普恩寺村、平尾村、浜浦村、大藪村、石田村、仮屋村、値賀川内村、小加倉村、外津村、向島(現在肥前町)を含んでいた。明治初期に今村と改称、明治二十二年(二八八九)四月一日の市町村制施行で平尾村、今村、浜野浦村、普恩寺村、値賀川内村、仮屋村、石田村、大藪村の八カ村が合併して値賀村となり、この八カ村は大字名となった。なお「値賀」と呼ぶ地名は、国内にはここよりほかにはないようだ。

遍歴の歌人・西行法師は、値賀の郷に入りて一首として、次の歌を詠んでいる。

ちかちかとかほどに遠き村里を

いづくの人かうそを言ふらん

### 第七項 有浦の地名

有浦(村)の地名は地形から生まれた地名とみられる。江戸期以前の有浦地域は、仮屋湾が深く湾入し、今の長倉の集落あたりは海岸だった。すなわち、湾口に向かって三方から山が相對している浜浦だった。当時は大吠川、下村川、上村川、有浦川などが流れ込む川水の多い浜浦だった。

これに目をつけた唐津初代藩主・寺沢広高は、この浜浦に干拓事業を始め、現在の有浦新田の陸地ができたが、この山あい(相、合)の浦がなまって、ありうらの呼称になったと考えられる。『地名の語源』(角川小辞典)に



も相はアイ、アリ、またアは湿地、津（船着き場）、イは水路を指し、ウラは入り江、海岸を指すと記されている。また、地元には、有浦川周辺の地形が蟻の形、行列に似ているから地名になったとの解説もある。

有浦の地名は南北朝ごろから文書に見える地名で、康永元年（北朝年号「一三四二」十一月七日の佐志氏源勤の次男・披への讓状（『有浦文書』）に「肥前国松浦西郷佐志村内有浦」とあり「今里村・□村・古力石村・久味中尾・中木場村・長田代村・□村（長）倉村・諸浦村等、北限は値賀大道・値賀塚に留め」とあって、有浦一帯を披に讓ったことが記されている。

披はこの後、長男成に代わって、佐志惣領職を継ぎ、松浦波多有浦源三郎源藏人披と有浦姓を名のり、南北朝の動乱期に北朝方として南朝の菊池と戦い戦死した。以来この地は披の血脈により伝領され、近世初頭まで続いた。



かつては奥深い入り江だった諸浦・新田地区

**有浦村** 江戸期には有浦村と称し、幕府への公式届け出は一村となっていたが、実際は上下二村として唐津藩では取り扱っていた。この二村は諸浦村、長倉村、轟木村、新田村、牟方村、大串新田とともに有浦組となり、明治二十二年（一八八九）の市町村制施行で、旧値賀組の小加倉村を加え、九カ村で有浦村となった。有浦の地名は全国的にみても、ここよりほかにはないようだ。

### 第八項 玄海町誕生

昭和二十八年十月一日、町村合併促進法が施行されて、わが町「玄海町」が誕生した。同三十一年（一九五六）九月三十日、佐賀県告示四一二号で、値賀村、有浦村との合併が認められ町制施行。その翌年の三十二年十二月三十一日、県告示五四四号で、旧切木村の一部・藤平、田代、座川内、湯野尾を合併して今日の行政区域となった。

合併当時の値賀村は八五八世帯、五、一〇一人、有浦村は六二五世帯、三、六三一人。旧切木村の四地区は合わせて二二〇世帯、七一五人、合計一、六〇一世帯、九、四四七人だった。それが三十年後の六十年十月一日の国勢調査では、一、七九五世帯、七、六二二人となっていて、世帯数は増え、人口は逆に減少している。

東松浦半島の前面に広がる海「玄海」。玄海には常に対馬暖流が流れ、古来大陸文化の流入する海、豊かな海の幸、海洋性気候のもたらす豊富な陸産物、さらに太古の時代阿蘇山噴火でできた玄武岩塊の連なる海岸、丘陵の景勝地。これらを地盤として、さらに将来に向け大発展を願う期待をかけて、これを町名にした。

町政施行三十年

その期待に<sup>こた</sup>えるかのように、玄海町が発足してからの三十年間、外津、仮屋漁港の養殖漁業は県内一、農産物でも果樹、園芸作物は郡内有数の産地に成長。さらに役場、学校などの公設施設の改築、新設、道路、港湾改良などが進められ、合併当時の零細村の面影はほとんどない。さらに加えるに九州初の原子力発電所が設置された恩恵もあって、五十一、二年度と五十七年度からは連年、県内唯一の平衡交付金不交付団体となっている。

六十一年九月二十九日、町制施行三十周年記念式典が盛大に挙行されたが、これを機にさらに将来に向けての飛躍が決意された。町勢が豊かにすすく伸びる表徴として、町木に<sup>けやき</sup>榲、日本の国花でもある<sup>さくら</sup>桜を町花に選び、次の町民憲章が制定された。(昭和六一年八月二十九日告示第四〇号)

町民憲章

私たちは、豊かで住みよい魅力と活力のある町をめざして、ここに町民憲章を定めます。

- 一 心のふれあう住みよい町をつくりましょう。
- 一 仕事に誇りをもち、活力ある町をつくりましょう。
- 一 豊かな自然を愛し、やすらぎのある町をつくりましょう。
- 一 心と体をきたえ、楽しい町をつくりましょう。
- 一 希望に満ちた文化の町をつくりましょう。

玄海の呼称

さて町名になった玄海とは、総称的にいって、東は福岡県鐘崎から海岸地域をたどり、西は西松浦郡全域および北松浦郡鷹島全域を含む海域とされ、その海岸線と玄界灘の十余の島々を含めて昭和三十一年六月、玄海国定公園に指定された。古くは玄界と書き、福岡市の玄界島からとった名称とみられ、灘を付けるときは玄界灘と書くが、一般的には玄海と書かれている。明治以降、現在のように広い海域に使われるようになった。

この海域は有史以前から大陸人が文化を携えて渡来してきた文明の道であったし、またわが国の古代人が朝鮮半島へ渡航する文化探求、親善の道・国際道路でもあったわけだ。輝かしい事跡を持つこの名称が、町名となったことに大きい誇りを持ってよい。

参考文献

- 肥前風土記、日本書紀、国史大系(吉川弘文館) ◆肥前叢書(青潮社) ◆佐賀県史(佐賀県史料刊行会) ◆東松浦郡史(名著出版) ◆西松浦郡史(名著出版) ◆松浦史(松浦史刊行会) ◆松浦叢書(名著出版) ◆大日本地名辞典(富山房) ◆歴史資料集(光文館) ◆世界百科大事典(平凡社) ◆佐賀県大百科事典(佐賀新聞社) ◆佐賀県地名大辞典(角川書店) ◆地名の語源(角川書店) ◆佐賀県の地名(平凡社) ◆佐賀の百年(佐賀新聞) ◆佐賀県の歴史(山川出版) ◆佐賀の二〇〇年(佐賀新聞社) ほか。





## 二 数理的的位置

本町行政の中心地である諸浦の町役場の位置は、およそ北緯三三度二八分三〇秒、東経一二九度五二分三〇秒の位置にある。本町西北端の値賀崎から最南部の湯野尾地区まで南北およそ一〇<sup>キ</sup>、東西幅は飯屋湾の高岩鼻から東の唐津市に接する有浦上地区東端までおよそ七<sup>キ</sup>で、南北にやや長い。

## 三 経済的社会的地位

本町は、一部の経済的社会的活動などを除けば、隣接する市町村のうち、鎮西町（面積三九・二〇平方<sup>キ</sup>、人口八、七〇〇人）と肥前町（面積四六・九平方<sup>キ</sup>、人口約一万一五〇〇人）との結びつきより唐津市との結びつきが強い。これは東松浦郡各町村（厳木町、相知町、浜玉町、七山村、北波多村、呼子町、鎮西町、玄海町、肥前町の七町二村）と唐津市の地理的位置関係が扇のかなめにあたる位置に唐津市があり、バス路線をはじめ主要道路交通網が放射的に結ばれているためである。したがって東松浦郡各町村は商圏、通勤、通学、文化圏などを総括した唐津市都市勢力圏内にあり、いわばその後背地（ヒンターランド）になっている。

## 四 文化的歴史的位置

本町は、文化的歴史的背景からみると、佐賀県西北部の唐津市を中心とした唐津地方（唐津・松浦地域）に含まれる。そもそもこの地域は、九州本土から神集島、小川島、加部島、加唐島、馬渡島、壱岐島、対馬などの島づたいに朝鮮半島にもっとも近く約二百<sup>キ</sup>の一衣帯水の距離にあり、古来からわが国と大陸文化の接点となつた地方である。付近一帯には、菜畑遺跡（唐津市）をはじめ旧石器時代からの数多くの遺跡があり、考古学上重要な地域である。また、中国の史書「三国志のうち魏志・東夷伝の倭人の条」に「……又渡一海千余里、至末盧国、有四千余戸、浜山海居、草木茂盛、行不見前人、好捕魚鱓、水無深淺、皆沈没取之。」

東南陸行五百里、至伊都国……」の海、山の幸に恵まれた末盧国は、この地方に比定されている。

古くは「まつら」と呼ばれ、律令時代に入ると肥前国松浦郡（長崎県に及ぶ）となつた。『肥前国風土記』に「まつら」の地名起源になつたといわれる「めづら」に関しての故事が記述されている。これは、神功皇后の新羅遠征の折の玉島川の鮎釣りの伝説にちなんでいる。また「鏡の渡」や「登望駅」などに関する記述もみられ、松浦佐用姫などの伝説も多く万葉集にもうたわれている。このように诗情豊かな土地柄ともなっている。

中世になるとこの地方は、松浦党（本町関係では値賀、有浦などの諸氏）が割拠したが、近世では、初代唐津藩主寺沢志摩守広高の領地（一二万三〇〇〇石）となり、寺沢氏断絶後は、譜代大名の大久保、松平、土井、水野、小笠原の諸氏がおさめた。この間に石高は六万石に減少した。

我々が住むこの地方は、同じ佐賀県内にあつても、外様の大大名（三五万七〇〇〇石）である鍋島氏一代の支配が続いた佐賀平野を中心とする佐賀地方とは、人情、風俗、方言など異なつた文化的風土を形成している。

かつて唐津湾一帯は松浦潟と称した。弥生期以前は、海岸線が鏡山（二八四<sup>尺</sup>）、衣千山（二六二・七<sup>尺</sup>）、夕日山（二七三<sup>尺</sup>）などの山麓まで入り込み遠浅の潟化（ラグーン化）していた。

その後、松浦川、玉島川、町田川などの沖積作用と近世以降の干拓によつて、今日の虹ノ松原をはじめとする松浦川沖積地が形成された。虹ノ松原はかつての沖合沿岸州（地理学上は唐津砂丘）で、日本三大松原の随一である。したがって、今日でも美しい風光の唐津湾一帯をさしいうるとき、万葉にもうたわれたその詩的な響きから、唐津湾の呼称よりも「松浦潟」の呼称の方が多く使われている。

本町は以上のような地理的、歴史的背景を持つ唐津地方の東松浦半島西岸に位置している。ともあれ玄海町は、町の中央を東から西に流れアユやシロウオがさかのぼる有浦川や志礼川、切木川の清流があり、それをとりま



区分される。わが国は西南日本に分かれ、西南日本は、さらに中央構造線によって内帯と外帯に

3 図参照。  
わが国の地体構造(地殻の骨ぐみ)は、大地溝帯(フォッサマグナ)によって東北

わが国は世界の大地形からみると、新期造山帯の環太平洋造山帯西縁の一角に

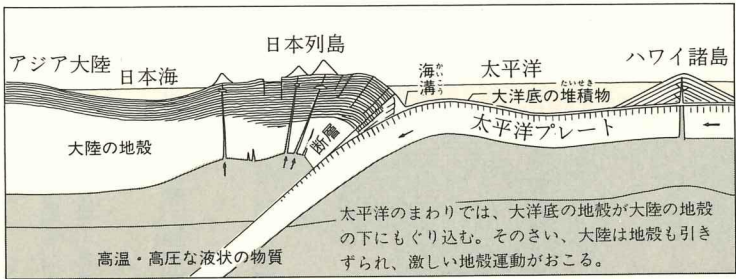
### 一 わが国の地体構造

### 第二項 地形および地質

て上場台地(東松浦半島の別称)が横たわり、海岸は波荒い男性的な玄界灘の荒磯  
と、波静かでリアス式海岸の典型的な風景美をみせ、玄海国立公園区域に指定さ  
れている。そこには外津浦、仮屋湾などがあり、美しく豊かな自然に恵まれた郷  
土である。

このような地理的、歴史的背景をもつ東松浦半島を鳥観したのが第2図である。

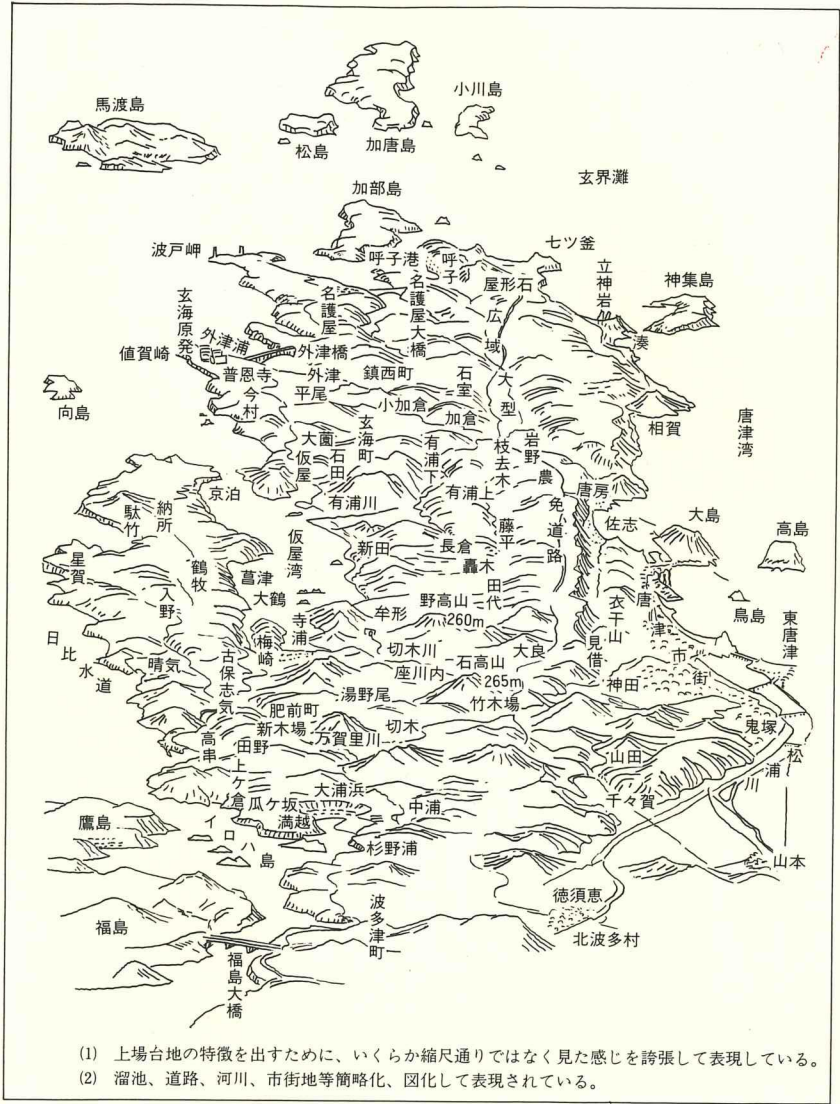
第3図 地殻の動き



第2図

上場台地鳥観図 (平田順二氏画)

(唐津東高校)



- (1) 上場台地の特徴を出すために、いくらか縮尺通りではなく見た感じを誇張して表現している。
- (2) 溜池、道路、河川、市街地等簡略化、図化して表現されている。

したがって、佐賀県は西南日本内帯に所属し本町地域は、白山火山帯が通っている。しかし、佐賀県西北部地域一帯は歴史時代に入ってから、記録的な火山活動や地震活動はほとんどなく九州地方の中では比較的、地殻変動が少ないところである。表層的な地盤変動として、上場台地から国見山地、長崎県の一部にかけて地すべり地帯が見られる程度である。

### 二 佐賀県の概要

佐賀県を地形的に大別すると佐賀平野部、背振山地（主峰＝背振山一、〇五五メートル）、多良火山地域（主峰＝経ヶ岳一、〇七六メートル本県最高峰）西部丘陵と西部山地（主峰＝国見山七七七メートル）、玄界灘島嶼部に区分できる。佐賀平野部は筑後川、嘉瀬川、六角川、塩田川などの形成するきわめて低平な沖積三角州であり、下部に洪積世堆積物、表層を沖積世の有明粘土層が覆っている。九州の代表的な穀倉地帯である。

背振山地は、大部分が變成岩類と中生代白亜紀の花崗岩類で構成され、一部に石灰岩地帯がみられる。西部丘陵地と西部山地は、新生代第三紀の堆積岩類とこの上に噴出した第三紀末から第四紀はじめにかけての玄武岩類を中心とした火山岩類からなり、石炭が分布する。

多良火山地域は安山岩質の成層火山で、開析がかなり深い放射状谷がよく発達している。

玄界灘島嶼部は、高島、神集島、小川島、加部島、加唐島、松島、馬渡島、向島などからなり、地形的にも地質的にも次の項でとりあげる東松浦半島とほぼ類似しており、おおむね玄武岩類から成り立っている。

### 三 東松浦半島（上場台地）の概要

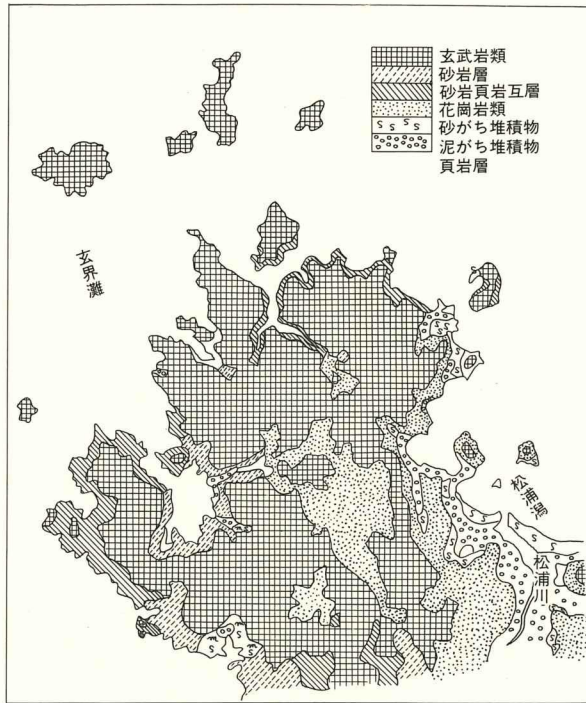
本町が位置する佐賀県西北部の玄界灘に突出した東松浦半島は、上場台地とも称される海拔高度一〇〇メートル以内の玄武岩溶岩台地（ベジオニーテ）である。

台地は、古い開析準平原の上を玄武岩類の溶岩流が覆ったもので、その基盤は北部と西部では新第三系、東部および南部では花崗岩と古第三系である。（第4図）東松浦半島は、南東部に高く（最高点＝唐津市馬場野ゴルフ場西方の三角点二六八・八メートル）、全体として西北に低くなりながら比高三〇メートル一〇〇メートルで玄界灘に落ちている。このため半島上の河川の多くは、北または西へ流れる。台面は佐志川（唐津市）、浦川（同）、江頭川（呼子町）、濁川（鎮西町）、野元川（同）、志礼川（玄海町、以下同）、石田川、有浦川、座川（切木川）などの小河川によってかなり複雑に開析されている。

台地は、これらの小河川沿いの複雑に入り組んだ樹枝状の浸食谷とその下流部の小沖積地、および浸食谷によって分かれたいくつかの台面ブロックから成り立っている。

台地から流れ下る小河川の多くは、古い開析準平原とその上を覆った玄武岩溶岩流との接点で、滝ないし急

第4図 東松浦半島表層地質図（上場台地）





流地点を形成している。

台地縁部の台地斜面では、この接点のところから台地上に降った雨水のにしみ出しがあり、台地斜面が水田化されている場合、台地面上に分布する数多くの溜池とともに、この滲出水も灌漑水として利用されている。したがって上場台地斜面では、条件よく台地上の溜池から灌漑水が得られない場合、この滲出水が得られる台地中腹以下が水田になっている風景がよくみられる。

また、この接点部分が東松浦半島の一部地域では、昭和二十八年（一九五三）の肥前町瓜ヶ坂の地すべりの惨事（死者二六名）のように、地すべりの要因ともなっている。

東松浦半島の沿岸部は、その東側と、北から西側では、地形的な様相が異なっている。東海岸では、半島台地面から切り離された花崗岩類または砂岩頁岩互層の上に玄武岩類をのせた神集島、高島と、砂丘、砂州によってつながれた相賀崎、黒崎山、大島山、満島山などのかつての離島であった小丘と、その背後の潟化（ラグーン）を埋めて形成された低平な松浦川、町田川などの沖積地があり、砂がちまたは泥がち堆積物からなっている。

したがって相賀崎、黒崎山、大島山、満島山などは陸繋島をなす。また沖積地背後の上場台地上は、玄武岩および花崗岩類から形成されている。

これにたいし半島の北側から西側は、沈水海岸で典型的なりアス式海岸を形づくっている。土器崎、波戸岬、串崎、値賀崎、入野半島（納所半島）が派生し、呼子浦、名護屋浦、串浦、外津浦、仮屋湾は溺れ谷である。地質的には、半島を覆う玄武岩層がそのまま海に落ち込んでいるか、その下面の第三紀堆積岩類層（砂岩、頁岩または両者の互層）が表出しているかで、ほとんど海食崖または岩石海岸となっていて平地に乏しい。

土器崎、串崎、値賀崎には、玄武岩の柱状節理が発達している。とくに土器崎には、そのみごとな海食洞がい

くつもみられ、「セツ釜」の呼称があり、国の特別天然記念物に指定されている。

佐志川沖積地に臨む上場台地東縁は、活断層崖になっている。

このような地形的、地質的特徴をもつ東松浦半島（上場台地）の西側に本町は位置している。

#### 四 本町の概要

地質的、地形的特徴から本町の地理

区を設定すると、次のように分類できる。（第5図参照）

##### 上場台地面

##### ア 北部ブロック台地面地域

（有浦川—上村川河谷より北部台地）

地）

##### イ 東部ブロック台地面地域

（上村川と有浦川河谷のはさむ東部台地）

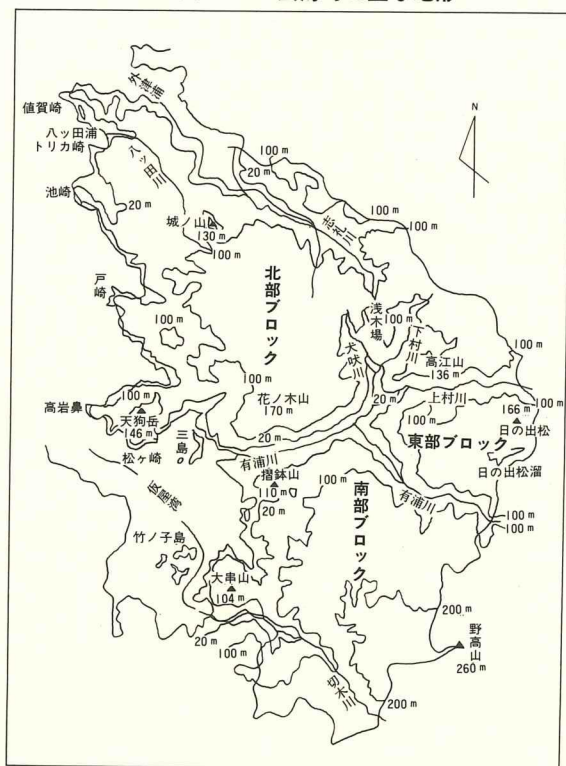
部台地）

##### ウ 南部ブロック台地面地域

（有浦川と座川河谷のはさむ南部台地）

河谷（浸食谷）と下流沖積地域

第5図 玄海町の主な地形



エ 志礼川河谷とその沖積地域  
オ 有浦川河谷とその沖積地域  
カ 座川(切木川)河谷とその沖積地域

沿岸部地域

キ 外津地区

ク 飯屋地区

ケ 牟形地区

となり、三つの大地理区とそれぞれに三つずつ計九つの小地理区が考えられる。

各小地理区ごとの地形的、地質的特徴は次のようになっていいる。

(一) 上場台地面

ア 北部ブロック台地面地域

このブロックは、主に旧値賀村地域にあたり、表層はほとんど玄武岩またはその風化土を基盤とした褐色森林土系からなっている。

下宮、普恩寺、中通、飯立、平尾、浜野浦、栄、大藪、石田、花ノ木、有浦下の一部の集落が、台地面または台地斜面にのっている。本町の台地面ブロックとしては東部、南部ブロックに比較すると、主要部の台地面高度が一〇〇メートルから五〇メートルとやや低い、ブロックとしてはもつとも面積が広い。

このブロックは、志礼川と有浦川の支流犬吠川の分水界が、浅木場のところで非常に狭くなっており(唐津方面から値賀方面に向かう県道が尾根の分水界上を通っている。すなわち道路が志礼川流域と犬吠川流域の水を分けているとい

う珍しい地形)、このためこのブロックは、この浅木場のところで東側の小加倉地区が乗っている台地面と西北側の下宮、普恩寺、中通、平尾、栄、大藪、石田などの集落が乗っている台地面とにさらに分けられる。下宮、普恩寺、中通、平尾地区は旧値賀村の中心地域で、小学校、中学校、駐在所、郵便局、役場出張所などがある。また、本町の北西端をなす値賀崎には、原子力発電所がある。

このブロックは、主要交通路としては浅木場のところを通って、唐津方面に至る道路一本であったのが、昭和四十九年に外津浦をまたいで、鉄筋コンクリートアーチ橋の外津橋(長さ二五二メートル、幅員九・五メートル)が対岸の鎮西町との間に完成し、国道204号が鎮西町名護屋地区方面と本町飯屋地区、肥前町方面へ通じるようになった。

イ 東部ブロック台地面地域

このブロックの台地面には、有浦上の日の出松地区がのっている。三つの台地面の中では、浸食谷の入り込みが少なく平坦な台地面を最も残している。高度一三〇メートルから一五〇メートルで平均高度は北部ブロックよりやや高いが、面積は三つの台地面の中でもつとも狭い。

地質的には、表層は北部ブロック、南部ブロックと同じく玄武岩類であるが、その基盤は花崗岩類で、他の二つのブロックとは異なっている。この台地面は、台地面上が水田化されている割合がもつとも高い。また上場台地に数多くある溜池の中ではもつとも大きいもの一つである日の出松溜がある。

ウ 南部ブロック台地面地域

このブロックは、台地面が二段から構成されており高度がもつとも高い。轟木、田代、座川内、湯野尾の一部、牟形の一部などの集落が乗る高さ一〇〇メートル前後の台地面と、開拓集落の大鳥などが乗る上場台地でもつとも高い台地面を構成する牧ノ地(高度二〇〇メートル〜二五〇メートル)の一部に該当する台地面の二段からなる。



地質的には、北部ブロックと同じである。

この台地面には、本町の最高点で、唐津市と肥前町の境界となっている小丘状（ビュート状）の野高山（二六〇・二七）がある。南部ブロック台地面は轟木、田代、湯野尾地区の一部を除けば、三つの台地面の中では水田化率がもつとも小さい。

## (二) 河谷（浸食谷）と下流沖積地

### エ 志礼川河谷とその沖積地域

本町最北部の外津浦に注ぐ志礼川がつくる河谷とその沖積地である。本町値賀川内地区にあたる。値賀川内は旧唐津藩以来、石工の集落として知られていた。

この地域は、地質的には上流部が台地面と同じ玄武岩層、下流部が砂が、ち、堆積物と砂岩頁岩互層からなっている。志礼川が延長約三キロの小河川であるから、その河谷と沖積地といってもきわめて狭小なものである。

### オ 有浦川河谷とその沖積地域

本町のほぼ中央部を東から西へ流れて仮屋湾に注ぐ東松浦半島最大の河川である有浦川（延長約一〇キロ）とその支流上村川、下村川、犬吠川などがつくる河谷とその沖積地である。

いわば本町の中心部をなす地域で有浦川下流沖積地には、諸浦、新田などの集落がある。役場をはじめ郵便局、小学校、保育園など本町の公共施設が集まっている。このほかに銀行、農協などがあり、諸浦は本町随一の商業的機能を持つ集落である。新田地区の有浦川河口の金ノ手は、東松浦半島の道路交通の要点の一つになっており、唐津方面からの県道と国道204号が合流している。唐津方面や本町の諸浦地区から来た場合、金ノ手で国道204号を仮屋橋で有浦川を渡って北上すれば、仮屋地区、大藪地区を経て値賀方面へ。さらに鎮西町、呼子町方面へ。

面へ。逆に南下すれば牟形地区を経て肥前町、伊万里市波多津地区方面へ至る。

また、中学校、保育園、老人ホーム、駐在所、高等学校、町民グラウンドなどの公共施設が集まっている。

この地域の有浦川、上村川、下村川、犬吠川の河谷には、諸浦、新田のほかに有浦上、有浦下、長倉の集落が分布している。

地質的にはこれら河谷は、海拔二〇メートル以上の上流部は花崗岩層かこうがんからなり、海拔二〇メートル以下の諸浦、新田などの集落がのる下流沖積地は、砂が、ち、または泥が、ち、堆積物で、その周囲は砂岩層が分布している。

この地域の下流沖積地は、本町はもとより東松浦半島北部から西部にかけての地域では、もつとも広い平地（幅約一キロ、長さ二・五キロ）となっている。新田の地名から分かるように、有浦川河口付近は近世に干拓されたもので、さらにその地先には、昭和四十年に完成した仮屋湾の干拓地がある。有浦川下流部は、現在の等高線でおよそ二〇メートル付近まで、かつて海岸線が入り込み、入り江になっていたものと思われる。長倉、藤平などの集落がある有浦川沿いの河谷は、唐津市の大良地区へ続き、有浦上の集落がある支流の上村川沿いの河谷は、同じく唐津市の枝去木地区を経て唐津市中心部へ至る主要道路が通り、下村川、犬吠川沿いの河谷は、本町の小加倉地区、値賀川内地区へと続く。

### カ 座川（切木川）河谷とその沖積地域

上流部は、肥前町切木地区、中下流部は本町の南部に当たる湯野尾、座川内、大串新田地区になっている。

地質的には、上流部は玄武岩層、中下流部に真岩層と泥が、ち、堆積物および砂岩層が分布している。最下流部の大串新田は、近世の干拓地である。牟形小学校があり、その背後の大串山（高さ一〇四・八メートル）東側には、東松浦半島唯一のトンネルがあり、国道204号が通っている。座川（切木川）の河谷は、本町から肥前町切木地区への

道筋になつてゐる。また、この河谷には、切木石あるいは唐津石といわれる安山岩や玄武岩系の石切り場が多い。

### (三) 沿岸部地域

本町の北部、外津浦、値賀崎から西部海岸にかけての八ッ田浦、トリカ崎、池崎、戸崎、高岩鼻、仮屋湾の沿岸部にあたる。

上場台地がそのまま玄界灘に落ちているため沿岸は、海食崖(高度三〇メートル一〇〇メートル)か岩石海岸になつており、ほとんど平地がみられない。したがつて集落が少なく、わずかに台地面がげ下下に小平地が開けているところに密集してゐて、本町内では大集落である外津、仮屋と牟形があるだけである。

沿岸は典型的沈水式(リアス式)海岸で外津浦、仮屋湾は溺れ谷。仮屋湾には三島、竹ノ子島、藤島、玉子島などが浮かび美しい風光をみせてゐる。仮屋湾は玄界灘からの冬の北西季節風が強いときでも、波静かである。これにたいして、値賀崎から高岩鼻にかけては玄界灘の外海に面し、値賀崎付近には玄界灘の荒波に洗われるみごとな玄武岩の柱状節理が発達してゐる。沿岸には、玄武岩層下の基盤になつてゐる砂岩層や砂岩頁岩互層もみられる。

#### キ 外津地区

外津浦西岸の台地面がげ下下であり、仮屋に次ぐ集落。玄海沿岸の漁業基地の一つ。

#### ク 仮屋地区

仮屋湾の北岸湾口部に、仮屋湾を押しさえるように横たわる天狗岳(高さ一四五・九メートル)のげ下下から、石田川につくる小沖積地にかけて、密集してゐる仮屋集落を中心とする地域。

仮屋は、本町の集落では人口がもつとも多い。外津と同じく玄海沿岸の代表的漁港である。

#### ケ 牟形地区

仮屋湾南東岸で上場台地斜面からそのげ下の小平地にまたがる地区。沿岸部の集落としては仮屋、外津に比べ人口が少ない。沿岸部にあつても漁業集落ではなく農業集落である。地質的には砂岩層で、地すべりがある。

以上が地形、地質を中心とした本町の九つの地理区の概要である。このほか浜野浦川沿いに北西から南東方面に活断層の疑いのある地形的線状模様(リニアメント)がみとめられるという。

### 第三項 主な地形物 〓 河川、山、峠、岬、島、湾、瀬、池など

#### 一 主な河川

本町の位置する東松浦半島そのものが、東西八キロから十キロ、南北十五キロ足らずの小さい半島であるから、半島内には小河川しかなく一般に水量が乏しい。

本町内の主な河川は北から志礼川、八ッ田川、浜野浦川、石田川、有浦川、座川(切木川)の諸河川があげられる。東松浦半島(上場台地)の地形的、地質的特徴のところでも述べたように、半島上を流れる河川ほとんどは北西流または西流として玄界灘に注ぐ。これらの河川の多くは、台地を覆う玄武岩類とその下の古い開析準平面との接点のところで、急流または小滝を形成してゐる。

#### ア 志礼川

本町北部の旧値賀村地域内にある河川の一つで延長約三キロ(建設省唐津土木事務所管理水系延長では、一、六一五メートル)。本町の小加倉集落付近に源を発し、ほぼ北西流しながら右岸より鬼木川、左岸より谷川、七ツ枝川などの小



支流を合せ外津湾奥に注いでいる。本流部では、下流に小沖積地をつくり、流域の中心に値賀川内集落がある。支流の七ツ枝川は、上場台地面から流れる地点に小さい滝をつくる。本流の最上流部では、浅木場のところで道路一つ隔てて犬吠川との分水界となっている。

#### イ ハツ田川 (前田川)

志礼川と同じく本町北部の旧値賀村域にある川。延長約二<sup>キ</sup>(管理水系延長は七六七<sup>メートル</sup>)。流域には旧値賀村域の中心地区にあたる下宮、平尾などの集落がある。値賀中学校横の今村溜(たぬ)の流れ込みから発し、ほぼ北西に流れてトリカ崎近くのハツ田浦に注ぐ。最下流部に原子力発電所の用水池が造られている。

#### ウ 浜野浦川

旧値賀村域の本町北西部の河川で延長約二<sup>キ</sup>(管理水系延長一、六一五<sup>メートル</sup>)。大霜集落付近の上場台地面上に発し、ほぼ北西に一気の上場台地斜面を流れ下って玄界灘(た)に注ぐ。中下流部は、小河川の割に深い浸食谷を形成している。

#### エ 石田川

大霜集落南側の上場台地面上に発し、南西流して仮屋湾に注ぐ。延長わずかに約一<sup>キ</sup>(管理水系延長は三五七<sup>メートル</sup>)。左岸上場台地斜面に石田集落があり、下流小沖積地に仮屋集落の東部が差し出している。

#### オ 有浦川

東松浦半島最大の河川で延長約十<sup>キ</sup>(管理水系延長七、七〇〇<sup>メートル</sup>)。唐津市竹木場地区の石高山(高さ二六五<sup>メートル</sup>)北面に発し、北流しながら上場台地に梨川内地区(唐津市)、大良地区(唐津市)の浅い浸食小盆地をつくって、大良で右岸からの支流後川内川(うしろがわ)を合わせる。大良からは北西流し、本町旧切木村地域の藤平地区に入る。藤平付近で

は急流地点を形成し、それより下流は、やや深い浸食谷となって大平集落を経て長倉地区の広い谷に出る。この間、右岸より舞川(まいがわ)が合流する。藤平には、ミニ水力発電所がある。

長倉から下流は、沖積地を形成、本町最大の平地となっている。諸浦で右岸から西流してきた支流の上村川を合わせて、西流し仮屋湾東岸に注いでいる。支流の上村川には、さらに下村川、犬吠川、白畑川(しろはたけがわ)などの小支流がある。有浦川水系は、水に乏しい上場台地にとって最大の水源となっており、支流の後川内川上流部には昭和五十八年後川内ダムが建設され、佐賀県北西部の中心河川・松浦川水系からの揚水が予定されている。有浦川下流域の旧有浦村域の長倉、諸浦、新田地区は、本町の中心地域を形成している。河口付近の新田地区には、江戸期造成された干拓新田や新田地先に昭和期に完成した県営有浦干拓がある。一部が中学校、高等学校地などに転用されている。

有浦川水系は本町のみならず、上場地域社会の大きな基盤の一つを形成するとともに、シロウオ漁やアユ漁にみられるように、その清流は、郷土の人々の生活に密着し親しまれている。

#### カ 座川 (切木川)

本町のもっとも南部地域にある河川で延長約六<sup>キ</sup>(管理水系延長四、五七三<sup>メートル</sup>)、有浦川に次ぐ河川。肥前町赤坂集落北部の上場台地面上に発し、切木の浅い小盆地を形成しながら、本町湯野尾地区からは、上場台地斜面を急流して、座川内地区、牟形地区南部に出る。最下流部の大串新田は、一八世紀の宝暦年間に造成された干拓新田である。

座川下流は、肥前町との町境になっている。支流に左岸からの古郷川がある。

#### 二 主な山・峠

本町の大部分を占める上場台地は、玄武岩が上部をあふれ流れた比較的高度の低い（おおむね高度一〇〇〇〜二〇〇〇）溶岩台地（ベジオニート）であるため、独立峰的な山らしい山はない。

台地を形成する玄武岩類が、台地面上を流れる小河川の浸食によって開析されるとき、小丘（ビュート状）または、小台地（メーサ状）の残丘になっているのが目だつ程度である。したがって峠らしい峠もない。

本町内のこれらの主な小丘をあげてみる。

#### ア 城ノ山（二二九・九）

本町北部の旧値賀村域の仮立にある。中世松浦党の一員としてこの地域を支配した値賀氏の居城跡とされ、石垣などが残っている。頂上付近は、メーサ状の小丘を呈し三角点は、北端部に設置されている。

値賀地域の中心部を見下すのに絶好の地形的位置にある。現在は、頂上付近に本町の上水道施設（昭和六三年四月まで簡易水道）がある。

#### イ 高江山（二二六）

三角点や標高点はない。北部ブロック台地面の一部が、上村川と下村川の河谷に挟まれて突き出した尾根の先端部にあたり、西に有浦川下流沖積地の諸浦、新田地区、北に下村川河谷の有浦下地区、南に上村川河谷の有浦上地区を臨み、三方を急崖に囲まれた要衝地である。東は、北部ブロック台地面へとつながっている。中世この地を領した松浦党の一員有浦氏の居城・高江城のあったところ。山頂付近には空堀のあとが残っている。山腹が険しく雑木林に覆われ道らしい道は残っていない。

#### ウ 天狗岳（二四五・九）

仮屋湾北部湾口に東岸からつき出てそびえ、仮屋湾を抱くかたちになっている。西側の高岩鼻から狭い水道を

挟んで対岸は、肥前町入野半島（納所半島）の京泊である。本町の他の山と同じように中腹からは、玄武岩類であるが、中腹から下は、砂岩層と砂岩頁岩互層からなっている。低いわりに険しく、全山雑木の自然林が密生している。中腹に巖島神社があり、東南麓がけ下は仮屋集落である。「天山（天狗岳）の落照」とたえられて、仮屋湾八景の一つになっている山。

#### エ 擢鉢山（二〇九）

有浦川河口の左岸にある小丘。頂上に祠があり、有浦川下流域の諸浦、新田集落、有浦新田、美しい風光の仮屋湾一帯の展望がよい。小台地（メーサ状）の山容から山の名がついたものと思われる。

#### オ 野高山（標高二六〇・二）

本町の南東部の大鳥集落地区にあり、唐津市、肥前町との境界になっている。頂上に建設省国土地理院の三角点がある。上場台地で高さでは、唐津市馬場野ゴルフ場西方の三角点（二六九）、同じく唐津市竹木場の石高山（二六五）に次いで三番目であるが、台地のほぼ中央部にあり、頂上付近が以前は草地であったため上場台地随一の展望であった。しかし、近年は雑木が繁り展望がきかなくなった。周囲の牧ノ地（上場台地でもっとも高い台地面ブロック）には、第二次世界大戦後引揚者などが開拓農家として入植した。

#### カ その他

以上のほか三角点、標高点が設置されている小丘を拾ってみると、牟形地区の大串山（二〇四・三）、日の出松地区の三角点（二六六・八）、栄地区の三角点（一八五・六）、大藪地区の標高点（一四二・六）などがある。

#### キ 峠（犬吠峠）

本町内ではただ一カ所の峠。河川のところでふれた志礼川流域と有浦川の支流、犬吠川流域の分水界となって



いる浅木場（海拔およそ一〇〇メートル）の所がそれ。ここは、分水界鞍部のところで、小加倉方面と値賀方面、値賀川内方面と有浦方面に通じる道路が尾根線上で十字路になっているという珍しい地形になっている。

### 三 主な岬・湾・入り江・島・瀬

岬としては、北から値賀崎、トリカ崎、池崎、戸崎、高岩鼻、松ヶ崎がある。湾や入り江では、外津浦、八ッ田浦、仮屋湾。島としては外津浦に小島（幽霊島）、仮屋湾内に、三島、藤島、玉子島、竹ノ子島（肥前町）があるが、いずれも小島で三島を除けば無人島である。瀬は、白瀬、小平瀬、蝦蟇瀬などがある。

以上のうち主なものについてみてみる。

#### ア 値賀崎

本町の西北端で玄界灘に突き出た岬。付近一帯は、見事な玄武岩の柱状節理が発達した海食崖で三〇メートルの断崖に玄海の荒波が押し寄せ男性的な豪快な風景である。先端に無人の灯台があり、岬近くの台地上には、昭和五十年（一九七五）に運転を開始した九州初の九州電力玄海原子力発電所がある。昭和六十年（一九八五）現在、一、二号機（最大発電能力一・二万八〇〇キロワット）が稼働中で、三、四号機を建設中である。

#### イ 外津浦

鎮西町串崎と本町値賀崎の間に、玄界灘から約三・五メートルの志礼川河谷の溺れ谷である。湾の中央がひょうたんのようにくびれ、幅がわずか三〇メートルになっており、この部分に外津浦がかかっている。

外津浦は、長さ二五二メートルで両側に幅一・五メートルの歩道をもつ全幅員九・五メートルの鉄筋コンクリートアーチ橋。海面からの高さは三〇メートル。昭和四十九年完成。外津浦で中断されていた国道二〇四号は、この橋によって結ばれ、本町値賀地区と鎮西町との交通が便利になった。

外津浦西岸には、外津漁港があり、湾内では、ハマチ、タイなどの養殖がさかんである。

#### ウ 仮屋湾

東松浦半島と、東松浦半島からさらに派生した肥前町の入野半島（納所半島）との間の、玄界灘から約四・五メートルの有浦川と座川（切木川）の溺れ谷。本町沿岸部は玄海国定公園の一角にあり、美しい風景をもつが、その中でも仮屋湾は湾内に三島、藤島、玉子島、竹ノ子島（肥前町）の島々が浮かび、リアス式海岸の典型的な風光美をみせている。湾の東西幅が約二・五メートルあるのに対し湾口が五〇メートルと狭く、その上、入野半島（納所半島）や天狗岳によって風が遮られるため、冬の北西季節風の強い玄界灘が荒れている場合でも、湾内は静かである。このため季節をとわず唐津、佐賀、福岡、北九州方面からの釣り客が多い。また、ハマチ、タイ、真珠などの養殖漁業がさかんである。明治当初、長崎県佐世保と軍港誘致を争ったが、軍港としては湾が全体的にやや狭いこと（湾の中央部水深が二〇メートル以下）、後背地の社会的条件が不十分なことなどで敗れた。湾に面して仮屋集落をはじめ、牟形、肥前町の寺浦、梅崎、大鶴、葛津、京泊などの集落があり、湾には石田川、有浦川、座川（切木川）などが注いでいる。有浦川河口の金ノ手と、肥前町の京泊、葛津の間には渡船があった。

#### エ 三島

仮屋湾内の北東部にある島。島といっても本土とわずか三〇メートルしか離れておらず、橋で結ばれている。

島全体が砂岩層からなり、地形的には、中央部が埋め立ての小平地と小丘、北部が三島神社のある小丘、南部は砂岩の細長い台地状の切り立った二〇メートルほどの断崖になっている。中央部の平地には、町福祉センター、小丘に五社神社がある。

北部の小丘にある三島神社は、旧村社で仮屋湾に面して海岸に二基の鳥居があり地域民の信仰が厚い。秋祭り

には、二台の神輿を漁船に乗せて、数十隻の漁船が供奉して仮屋湾内を巡行する。

#### 四 池・湖沼

本町には自然の大きな池や湖沼は存在しない。しかし上場台地が海に面しているわりに夏の雨量が少なく、その上、地形的、地質的に豊富な水源が乏しく保水力も不十分な状態にあるため、台地上に人工的な溜池が多い。本町内にはおよそ五十の灌漑用溜池がある。主な溜池としては、日の出溜、下場溜、今村溜、甲頭溜、平尾溜、丸尾溜、柳山溜、石田溜、日の出松溜、諸浦溜、三枚溜、轟木溜、湯野尾上溜などがある。このうち日の出松溜がもっとも大きい。これらの溜池は、台地上や浸食谷沿いにある水田、または、台地上の畑地の農用水に利用されている。しかし、溜池が台地上の浸食谷最上流部の谷頭にあるため水源は、台地面に降った雨のわずかな自然の流れ込みによっている。したがって溜池自体の用水の確保が困難である。夏に農用水が不足するためその対策の一つとして、上場台地の水田はほとんど早期作になっている。また、上場台地内にくつかの農業用ダムの建設が計画され、そのうちすでに打上ダムと後川内ダムは完成した。ただし上場台地では十分な水源の確保が無理なので、これらのダムの水源として松浦川水系からの揚水が講じられている。水利権や膨大な建設費などで問題も多いが、町内では現在、藤平ダムの建設計画が進められている。

#### 五 その他の地形

河川のところでみたように、志礼川支流の七ツ枝川、有浦川、座川（切木川）などには急流地点ないし小滝がある。

### 第四項 土壌

#### 一 本県の土壌

主要地域を大別すると背振山地地域の林野土壌は、ほとんど花崗岩類を母岩とし褐色森林土がもっとも広く分布。八幡岳、女山山地域は、玄武岩、安山岩の火成岩が第三紀層を貫入して山地が形成されており、このため土壌の多くは、第三紀層、安山岩、玄武岩の風化したものか、それらの沖積物。多良山地域は、安山岩類、玄武岩類、第三紀層からなり、褐色森林土がもっとも広く分布。本県低地の中心をなす佐賀平野地域の土壌は、佐賀平野の生成過程を反映して各種の低地土壌からなり、生産力が高くて九州地方の穀倉の一つとなっている。

#### 二 東松浦半島の土壌

この地域は、第三紀層、玄武岩、花崗岩などから形成されているが、その林野の土壌は褐色森林土系が多く、生産力はあまり高くない。

農地の土壌は、玄武岩の風化物を母材とするものが広く分布し、赤色土壌、黄色土壌などである。土性は、腐植層がなく表土の腐植含有量がごく小さく、下層は微粒質で通気性、透水性が悪く保水力が小さい。土壌改良を行わなければ生産力は低い。

#### 三 本町内の土壌

北部ブロック台地面では、褐色森林土（赤褐色系）と赤黄色土系の赤色土壌、暗赤色土壌が広く分布し、東部ブロック台地面では、褐色森林土（赤褐色系）と赤色土壌が、南部ブロック台地面では、褐色森林土（赤褐色系）と赤黄色



土、褐色森林土（黄褐系）が中心となっている。また、本町の沿岸部では、乾性褐色森林土が、有浦川や志礼川、座川（切木川）などの河谷では、灰色低地土やグライ土などが分布している。いずれも生産力は低い。

## 第五項 気象・気候

### 一 わが国の気候

日本の気候は、北海道地方と東北地方北部が冷帯湿潤気候区、本州、四国、九州地方のほとんどが温帯湿潤気候区となっている。夏は太平洋からの、冬はシベリア大陸からのモンスーン（季節風）の影響を受けるため、同緯度の大陸西岸に比較すると夏と冬の気温の差（年較差）が大きい。

このため春夏秋冬の四季の区別が、世界でもっとも明瞭な地域の一つになっている。年降水量も温帯としては多く（普通、平地で一、五〇〇ミリ、二、〇〇〇ミリ）、熱帯とあまり変わらないほどである。

冬は、大陸のシベリア気団から吹き出す北西季節風の影響を受ける。この季節風は、もともと大変寒冷で乾燥しているが、日本海をわたつてくるときに寒冷がいくぶん緩和されるとともにある程度の湿気をおび、これが日本海側に大雪をもたらす。日本海側の冬は、曇天と雪空が多くなり、いっぽう、山脈を越えた風下の太平洋岸は、カラカラに乾燥し、晴天が続く。

シベリア気団の勢力が衰え、本格的な春になると中国大陸の揚子江気団から次々と移動性高気圧と温帯低気圧が交互に通過し、天気の変化が激しくなる。

初夏には、北海道、東北北部以外は梅雨となる。太平洋の高温多湿な小笠原気団と冷涼湿潤なオホーツク海気団が交互に形成された梅雨前線が、日本列島南岸に停滞し、西日本を中心に降水をもたらす。オホーツク海気団の勢力が強い年には、東北日本の太平洋岸では、「やませ」が吹き冷害になることがある。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩にいう「サムサノナツ」になるのである。

太平洋からの高温多湿な小笠原気団の勢力が強まり、それに覆われると梅雨があけ本格的な夏となる。真夏の太陽がシリシリと照りつけ熱帯並みの高温多湿な日が続く。湿度が高く風が弱いので夜になっても暑く寝苦しい。

夏の終わりから秋にかけては、赤道付近の海上で発生した熱帯低気圧が発達して台風（最大風速毎秒一七以上）となり西日本を中心に襲来する。また、九月下旬から十月上旬には、秋霖（秋の長雨で一種の梅雨現象。年によってみられないこともある）になる。

この季節を過ぎるとふたたび、中国大陸の揚子江気団からの移動性高気圧と温帯低気圧の気圧の谷が次から次と交互に通過し、比較的天気恵まれた秋晴れの季節となって秋は次第に深まっていく。やがて木枯しが吹き出し寒冷なシベリア気団からの季節風がやってきて冬となる。

以上が、わが国の四季の移り変わりのあらましである。

### 二 佐賀県の気候

佐賀県は、福岡県、長崎県、熊本県、鹿児島県の大部分とともに、太平洋側九州型に属する。このタイプのうち北九州地方には、山陰地方に似た日本海型の天気の地域も一部にある。九州は、九州型以外に大分県が瀬戸内型、宮崎県と鹿児島県の一部が南海型、鹿児島県の一部と沖縄県が南島型となっていて一般に高温多湿。本県の気候は、わが国全体の気候の移り変わりとは大差ないが、春先に中国大陸からの黄砂がみられ、梅雨最盛期またはその末期に集中豪雨にみまわれることがある。九月から十月のはじめにかけては、台風の襲来がある。異常気象

の年を除けば一般に初霜は十一月中旬から下旬、終霜は三月下旬から四月中旬、初雪は十二月中旬から下旬、終雪は三月下旬、初氷は十一月下旬、終氷は三月下旬から四月上旬である。佐賀市での最暖月は八月で平均気温二七・四度、最寒月は一月で五・〇度。したがって年較差が二二・四度あり、これは九州の県庁所在地としては熊本市について大きい。年平均気温一六・〇度、年降水量一、八八九・五<sup>ミ</sup>で七月もつとも多い。県内的にみれば、冬の北西季節風の影響は有明海沿岸より玄海沿岸地方が強く、冬の天気は佐賀平野部より玄海沿岸が一般的に悪くて日本海側山陰型にやや似ている。ただし玄海沿岸は対馬暖流の影響で冷え込みは厳

(表1) 上場台地一般気象 (昭和41~58年平均)

項目	月												累計	平均	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12			
気 温	最 高	8.5	9.0	10.5	17.4	21.6	24.5	28.5	29.6	26.0	21.2	15.8	10.7		18.6
	最 低	1.8	1.8	4.2	9.0	13.0	17.1	21.8	22.4	18.9	13.5	7.9	3.8		11.3
	平 均	5.0	5.6	9.0	13.9	18.1	21.3	25.4	26.4	22.9	17.9	12.5	7.1		15.5
降 水 量		91	105	122	183	139	265	351	194	176	118	108	80	1,931	
	(S47年・55年を除いた平均)	(82)	(104)	(113)	(185)	(129)	(262)	(285)	(129)	(170)	(109)	(103)	(80)	(1,751)	
S53 57平均	日照時間	105	121	183	187	223	143	162	193	161	193	143	122	1,936	
	平均風速	2.8	2.8	2.6	2.4	2.0	1.9	1.7	1.8	2.4	2.3	2.1	2.2		2.3
5年間に10m/S以上の発現回数	6	4	2	1	0	0	1	0	1	7	2	2	26		

観測所、唐津市枝去木石原 北緯33°29'5 東経129°54'2 標高110m 海岸線から4.5kmの内陸部  
昭和53年からアメダス観測による。

- 最大降雨年  
昭和47年 3,235mm (7/11 247mm 7/12 163mm 7/13 209mm)  
昭和55年 3,446mm (7/30 147mm 8/29 227mm 8/30 246mm)
  - 最高、最低極年  
最高極 昭和41年8月7日 35.6℃ (アメダス 54.8, 16 34.0℃)  
最低極 昭和52年2月16日 -7.2℃ (アメダス 56.2, 26 -6.2℃)
- ※昭和47年と55年は気象異常年で冷夏多雨でとくに7、8月の雨量が極端に多かった。

### 三 本町の気候

本町の気象、気候は、本町内に観測地がないので、唐津市枝去木石原の佐賀県畑作試験場のアメダス(気象ロケット) 観測値によつてみる。この地点は、本町と同じ上場台地にあり、数<sup>\*</sup>しか離れていないので、本町の代替データとして使つても差し支えない。(第1表)

上場台地の気象は、佐賀平野部の有明型に対して玄海型とよばれ、先に述べたように冬の北西季節風が強いが、対馬暖流の影響を受けて気温の年較差が小さい。最暖月は八月で二六・四度、最寒月は一月で五・〇度で、年較差は二一・四度である。夏季は晴天が多く、冬季は曇天の多い裏日本(日本海型)的な天候を示す。

年平均気温は一五・五度であるが、七月から八月の最高気温の平均は二八・六度で、佐賀平野部の有明型に比べ、最高気温では二度前後低く、夏はやや涼しい。また、一月から二月の最低気温の平均は一・七度前後で、佐賀平野部よりやや高い。海岸線よりおよそ一<sup>\*</sup>以内は年平均気温が一六度以上で、沿岸部には無霜地帯もみられるが、四<sup>\*</sup>以上の内陸部では、最低値がマイナス六度前後になることもある。

年平均降水量は一、七五一<sup>ミ</sup>で、佐賀平野部より若干少なく、年変化が大きい。佐賀平野に比べ、夏の七月から八月の雨量が少なく、夏作は干害を受けやすい。このため溜<sup>た</sup>池の分布が多く、水田は干害をさけるため早期作が多くなつている。秋から冬(十一月~二月)にかけては、佐賀平野部より雨がやや多い傾向にある。

日照時間は、一、九三六時間を示すが、秋から冬にかけては、佐賀平野より一〇〇時間あまり少ない。風速は、玄界灘に突き出た半島で台地になつているため、平均風速は二・三<sup>ミ</sup>であるが、冬期は「北西」または「西北西」の季節風が強い。微気候的にみれば、上場台地面と各河川の河谷沿い、および玄界灘沿岸部とは、雨量や冬の



(表 2) 佐賀県市町村別土地利用状況

経企庁佐賀県土地分類図資料より東松浦郡の分 (単位 ha)

区分 市町村	農 地									草 地			
	田			畑						農地計	利用草地	未利用草地 (原野)	草地計
	普通田	特殊田	計	普通畑	牧草畑	樹園地			計				
					果樹園	桑園	その他						
浜崎玉島	388	-	388	15	0	1,246	5	1,251	1,266	1,654	8	1	9
七山	272	-	272	25	47	411	1	412	484	756	36	27	63
巖木	288	-	288	27	16	445	10	455	498	786	22	-	22
相知	634	0	634	28	1	366	2	368	397	1,031	10	-	10
北波多	283	-	283	18	1	165	25	190	209	492	3	-	3
肥前	706	0	706	430	62	299	1	300	792	1,498	17	-	17
玄海	569	-	569	237	32	281	4	285	554	1,123	12	-	12
鎮西	401	-	401	312	91	307	0	307	710	1,111	7	-	7
呼子	34	-	34	173	7	19	-	19	199	233	0	-	0
東松浦郡計	3,575	0	3,575	1,265	257	3,539	48	3,587	5,109	8,684	115	28	143

(単位 ha)

区分 市町村	林 地										宅地	公 共 の 用 地 他	合 計	
	人工林			天然林			未立木地			除地				林地計
	針葉樹	広葉樹	計	針葉樹	広葉樹	計	採草放牧に利用している土地	その他	計					
浜崎玉島	1,382	12	1,394	178	521	699	1	347	348	-	2,441	106	997	5,207
七山	3,239	2	3,241	59	493	552	5	474	479	-	4,272	37	1,189	6,317
巖木	2,865	13	2,878	63	927	990	6	528	534	-	4,402	73	743	6,026
相知	2,357	14	2,371	111	1,537	1,648	0	251	251	-	4,270	100	1,109	6,520
北波多	769	5	774	35	575	610	-	220	220	-	1,604	56	471	2,626
肥前	337	3	340	42	990	1,032	1	369	370	-	1,742	84	1,342	4,683
玄海	356	9	365	24	714	738	2	250	262	-	1,365	58	1,018	3,576
鎮西	242	10	252	48	1,105	1,153	2	175	177	-	1,582	62	1,154	3,916
呼子	26	1	27	26	132	158	-	19	19	-	204	55	243	735
東松浦郡計	11,573	69	11,642	586	6,994	7,580	17	2,643	2,660	-	21,882	631	8,266	39,606

気温などに若干の相違があるとみられる。

第六項 面積と地目

本町は昭和三十一年九月三十日、有浦村と値賀村が合併し、玄海町と改称して町制を施行した。合併当時の旧有浦村の面積一五・九四平方キ、人口三、五〇二人、旧値賀村一五・一二平方キで人口五、〇二四人であった。その後間もなく昭和三十三年十二月三十一日、切木村の湯野尾、座川内、大良の一部田代、藤平を編入して現在の面積三五・八〇平方キとなった。

一 上場の土地利用状況

上場台地は地目別にみると、丘陵地の林野率は五〇%以下、農耕地はおよそ水田二四%、畑地九%、樹園九%で、畑地率は県内でも高いほうである。水田は台地上の浸食谷沿いに複雑に散在し、ほとんどが稲の単作で、夏の水不足対策として早期作が普及している。畑地には輸送園芸としての白菜、ニンニク、タマネギ、スイカ、バレイシヨ、大豆、イチゴなどが栽培されており、これらの特産地形成をめざしている。樹園地のほとんどは温州ミカンが栽培されており、畑地から転換したミカン園も多い。

ミカン園の大部分は、第二次世界大戦後に植栽されたもので、佐賀ミカンの発展(本県の年間生産量は約三〇〇万トンで、愛媛、静岡、和歌山について全国第四位、九州第一位)にともない急速にふえた。

このような上場台地の土地利用上の特徴を、本町をふくめた上場四町と東松浦郡町村について統計的にみると第2表のとおりである。

(表3) 大字区域別地籍調査後の筆数面積集計表

(右ページに続く)

地目 字名	宅地	田	畑	山林	原野	雑種地	墓地	溜池
小加倉	57 24,271.25	395 325,705	466 419,086	484 631,210	471 257,881	24 3,884	18 3,621	2 9,675
値賀川内	65 26,834.19	481 329,583	450 390,681	488 741,318	352 75,892	12 1,357	55 5,097	2 13,722
普恩寺	91 44,396.39	1,166 541,063	630 379,205	643 338,691	170 26,183	25 26,390	8 4,696	10 28,324
今村	421 245,388.4	1,692 1,151,169	1,095 678,111	760 788,715	734 184,713.22	134 564,901.87	48 9,253	39 56,373.59
浜野浦	48 22,316.95	462 288,578	460 365,317	327 397,733	240 85,023	7 3,017	21 3,533	7 21,988
大藪	62 24,571.65	601 284,063	877 465,317	515 377,922	591 220,325	17 28,090	5 2,091	8 33,448
平尾	50 26,303.25	328 236,426	280 226,208.67	227 186,600	150 27,998	20 2,578	29 5,138	8 62,615
仮屋	327 59,114.35	96 50,960	662 232,841.35	533 542,813	228 72,805	20 5,475	13 6,106	3 16.2
石田	111 58,263.07	689 422,840	708 1,053,332	547 952,809	413 236,560	18 5,577	17 3,999	44 51,823
新田	63 16,258.74	237 233,043	38 30,418	24 21,014	13 2,858	10 106,312	3 557	1 32,222
諸浦	273 79,330.51	402 273,036	219 161,537	278 393,312	175 41,032	10 885	36 6,103	3 872
長倉	88 39,423.49	386 270,414	255 207,154	320 417,510.04	216 92,841.69	21 4,937.07	30 4,451	4 1,164
有浦上	129 66,217.79	681 668,994	1,017 1,537,928	783 1,090,247	311 168,593	30 7,092	30 8,666	7 86,329
有浦下	71 38,783.40	303 359,971	354 343,051	552 1,003,653	270 120,168	15 3,826	36 3,980	
田代	20 11,762.35	270 233,352	178 167,930	183 255,188	106 37,063.53	3 933	8 1,706	4 1,108
轟木	43 23,882.86	430 326,393	216 231,150	270 270,804.22	221 171,803.61	6 2,251	13 2,459	8 22,074
藤平	30 13,374.61	153 170,407	184 252,715	198 314,259	170 175,254	3 293	9 1,726	1 132
牟形	105 66,387.60	644 612,108	963 1,274,475.80	818 1,115,139	651 335,964.89	38 19,052.51	24 6,285.78	17 1,999.24
大串新田	3 1,249.72	79 52,031	24 28,296	42 271,282	18 14,256	3 6,184	1 277	
座川内	65 32,428.14	354 351,510	260 322,704	434 578,583	282 204,506.72	6 690	7 1,840	5 18,831
湯野尾	39 22,092.51	324 323,458	281 321,180	367 545,824	187 97,659.94	10 3,211	12 2,198.01	6 20,393
合計	2,161 942,651.22	10,173 7,505,104	9,617 9,088,637.82	8,793 11,234,626.26	5,969 2,649,381.6	432 796,936.45	423 83,782.79	179 463,109.03

玄海町農業委員会調べ(昭和61年6月7日現在)(単位:㎡)

境内地	池沼	学校敷地	水路	水道用地	堤	井溝	保安林	字別合計	長狭物
1 553								1,918 1,675,886.25	道8.49 水1.50
1 741	1 151							1,907 1,585,376.19	道7.10 水2.55
2 4,781								2,745 1,393,729.39	道8.68 水1.20
3 1,792	4 39,083	1 12,526	5 84	1 286			4 56.100	4,941 3,788,496.08	道2.92 水11.61
1 1,457	7 170							1,580 1,189,132.95	道7.67 水1.57
2 672	4 109							2,682 1,436,608.65	道8.48 水0.51
1 853		1 11,768.29			1 1,953			1,095 788,441.21	道4.42 水0.40
4 3,176.70		2 5,314.38						1,888 978,621.98	道3.50 水0.29
2 7,175	3 372			1 506				2,553 2,793,256.07	道11.56 水1.56
1 212		1 44,270						391 487,164.74	道5.29 水7.26
1 1,146		1 13,725	13 184	1 1,555				1,412 972,717.51	道4.71 水2.35
1 609.97	1 71							1,322 1,038,576.26	道7.95 水5.37
2 2,343								2,990 3,636,409.79	道21.02 水5.29
1 847	7 701							1,609 1,874,980.40	道10.77 水2.84
3 740								775 709,782.88	道3.83 水1.13
1 285	1 20				1 1,367			1,210 1,052,489.69	道4.75 水1.30
2 301	2 97							752 928,558.61	道5.00 水2.56
2 1,934	3 288	1 5,977	2 5,296		2 1,389			3,270 3,446,296.82	道27.91 水2.57
								170 373,575.72	道1.44 水0.17
3 2,061	3 214				1 41	1 60		1,421 1,513,468.86	
2 1,773					1 381			1,229 1,338,170.46	
36 33,452.67	36 41,276	7 93,580.67	20 5,564	3 2,347	6 5,131	1 60	4 56.100	37,860 33,001,740.51	



上場四町とそれ以外の町村を比較してみると特徴的なのは、まず普通畑の面積で上場四町がいずれも三ヶタを示し、農地計面積にたいし高い割合なのをたいし、他の東松浦郡町村はいずれも二ヶタで、上場四町より少なく割合も低い。いっぽう、人工林、天然林などを含めた林地計ではその逆で、上場四町の林地率の低いことが分かり、溶岩台地である上場台地の特徴が反映されている。

上場四町で比較すると、町面積の極端に小さい呼子町は別として、玄海町、肥前町、鎮西町では、水田率、畑地率ともに大差ないが、肥前町、鎮西町の畑地率が本町よりやや高くなっている。

## 二 本町の土地利用状況

本町の土地利用、地目を字別に字別面積とともにみたのが第3表である。

本町内には、旧値賀村に今村、普恩寺、値賀川内、平尾、浜野浦、大藪、仮屋、石田の八字、旧有浦村に小加倉、有浦下、有浦上、諸浦、新田、長倉、轟木、牟形、大串新田の九字、後に切木村から合併した藤平、田代、座川内、湯野尾の四字の合計二十一の大字がある。資料の範囲では字面積で最も広いのは今村地区で、ついで有浦上、牟形、石田、有浦下の順。最も狭いのが大串新田地区である。

田では今村地区が最も多く、次いで有浦上、牟形の順。畑では有浦上、牟形の順となっており、大串新田地区は、字面積そのものが狭いこともあって田畑とも最少である。

溜池面積では、台地面を広くもつ牟形地区が広く、ついで上場を代表する日の出松溜などをもつ有浦上地区がこれについている。

宅地で見ると、字別面積で一番広い今村地区(四二二筆)がもっとも広く、次いで本町の中心的な商業機能をもち町役場もある諸浦地区(二七三筆)、牟形、有浦上、仮屋、石田の順。山林、原野はともに牟形地区がもっとも

広い。本町の産業別人口構成(くわしくは人口の項)が、第一次産業人口の割合が非常に高く、第二次産業人口、第三次産業人口の割合が低いという実態が、山林原野がもっとも広くついで田畑が多く、逆に宅地、工場地、その他公共用地が少ないという事実によく反映されている。

## 第七項 集落と人口

### 一 集 落

本町には二十一の大字があるが、大字と字の関係は次のようになっている。

#### ① 大字今村

杉、八ッ田、値賀崎、先部、浅湖、野田、サイホ、太田、多々羅、外津、野崎、浦山、中山、釘原、下前田、宮の下、今村、山口、瀧ノ下、仮立、尾ノ前、小倉、雉ノ尾、釜蓋、櫛山、堤田、棚橋、大橋、塩刈田、志礼川、西ノ平で計三一。

#### ② 大字普恩寺

北田谷、門前、甲頭、塔ノ谷、矢玄谷、上ノ口、立木、前田、後谷、野中、池田、駄菊、恩坊、池崎、新田、長瀬、古節木、池尻の計一八。

#### ③ 大字値賀川内

薄木、春田、日の出、頼ノ山、獅子田、南和田、中ノ段、七ッ枝、寶来、宮田、式畝町、小田、宮迫、平田、木場、八ッ枝、田向、江固、鬼木の計一九。

④ 大字平尾

女石、御嶽、古野、孟多子、敷田、平尾、西ノ浦の計七。

⑤ 大字浜野浦

下川、クツ越、高木場、丸尾、ダゲク、松ノ尾、笠山、長倉、カグメ石、浜、先部の計一一。

⑥ 大字大藪

八石、ビワセ、前田、大石ノ元、早崎、大藪、白土、古田、耳切、柳山、繁倉、値賀山の計一二。

⑦ 大字仮屋

名切、穂盛、十倉、仮屋、天狗嶽、経塚、魚ノ浦、能ノ浦、福ノ浦、高岩、水雫みずたまりの計一一。

⑧ 大字石田

大丸田、ガツタリ、中ノ谷、入川内、六畝、大谷、花ノ木、惣兵衛坂、石久保、尊田、大久保、北目、山の田、上場、永田、立花山、大霜、清水、名古根、津加根の計二〇。

⑨ 大字小加倉

牟田、小前田、鬼木、中駒、長谷、硯正、浅木場、山口の計八。

⑩ 大字有浦下

前田、入川内、十丈瀧、岸高、犬吠、中田、竹ノ下、後山谷、立畑、白畑の一、白畑の二、上場の一、上場の二、上場の三の計一四。

⑪ 大字有浦上

猪之爪、日の出松、西ノ股、クレ石、菜切、大迫、平山、瀧ノ上、京野、長田代、梅ノ迫、松尾、返答、小

返答、寺ノ上、山添、土井ノ内、今里、有川内、山ノ田、山ノ神、下田、日焼、力石、三石、後山、畑迫、大久保、高江、里の計三〇。

⑫ 大字諸浦

西ノ谷、宇田原、浜ノ田、石木、山中、大下場、大南、大岩の計八。

⑬ 大字新田

中ノ谷、銭亀、大新田、瀬ノ元、沖ノ田の計五。

⑭ 大字長倉

鍋石、野付、成竹、横道、平ノ辻、鬼塚、平野、川内、フソロ、神屋、川中、長ヲサ、石木、宿ノ内、岩崎の計一五。

⑮ 大字轟木

受付、一ノ坪、引越、廣山、境松、柳山、飯盛、轟木、板椎、上ノ坂、成川原、樋ノ口の計一二。なお成川原は飛地となっている。

⑯ 大字牟形

稗田、大鳥、牧ノ地、八ツ星、南浦田、柴神、牟形、中野、宇土、山ノ神、晴ヶ坂、小房、前谷、後谷、割岩、吉之坂、山ノ田、尾付川、玉子の計一九。

⑰ 大字大串新田

新田、大串の二つで最も少なく面積も小。

⑱ 大字藤平



七郎、遠藤、大平、藤平、古加倉、袖切川、田藤、藤田山の計八。  
⑱ 大字田代

田代田原、清水谷、平床、日焼田、渡世川の計五。

⑳ 大字座川内

座川内、和佐田、大谷、梅ヶ谷、亀石、後平、木場、野中、加部良の計九。

㉑ 大字湯野尾

向谷、湯野尾、山口、下木場、高尾山、中熊の計六。

全部で二十一の大字と二百七十の字となる。

本町の集落は農林水産業を基盤としていたので、機能的には、ほとんどが農業集落かそれに準ずる集落である。商業的集落としては、役場や郵便局、銀行などが所在する諸浦が本町内で唯一の集落といえる。漁業集落としては、外津と仮屋があげられる。集落の形態としては、諸浦が唐津方面へ向かう道路沿いの街村、外津と仮屋が漁業集落特有の海岸沿いの道路に密集した街村的な集落。他の集落は、一応集村的形態をしているが、密集の度合いが小さく、中には散村的なものもみられる。

集落の立地からみると本町の集落は、次のように分類できる。

(ア) 台地面上にほぼ乗っている集落。これには花ノ木、栄、大鳥などがあげられる。

(イ) 台地面上に一応乗っているが、前面に台地上まではいのぼった浅い河谷の水田があり、背後に台地上の丘陵がある集落。これには今村、平尾、小加倉、白畑、力石、日の出松、轟木、田代、大霜などがあげられる。

(ウ) 台地辺縁部の比較的ならかな台地斜面に展開している集落。これは普恩寺、浜野浦、大藪、石田、牟形、犬吠、加部良、座川内などである。

(エ) 台地を開析した河谷沿い、またはその下流沖積地に展開している集落。これは値賀川内、柚ノ木、長倉、諸浦、新田、大串新田、湯野尾などがいえよう。

(オ) 台地がけ下の沿岸小平地に密集している集落。これは漁業集落の外津、仮屋である。

以上の五つに類型化できる。このうち(イ)、(ウ)、(エ)、(オ)の場合は、集落の向きがほとんど西北、西、西南、または南を向いている。地形的な制約から、北、北東、東向きもみられないわけではないがほとんどない。東南向きは、若干の集落にみられる。

これは、南向きが日当りがよいという北半球の日射条件と、本町の位置が上場台地西側にあり、河川が西北流または西流しているので、その方向に河谷や沖積地がのびていることが原因している。

次に各集落について立地概要をみてみることにする。(世帯数、人口は昭和六〇年国勢調査結果数)

#### ○旧値賀村地域

仮立 世帯数五四戸、人口二六八人。

中世、松浦党の一員・値賀氏の居城であった城ノ山(標高二二九・九尺)が東側背後にあり西方前面に今村溜がある。国道204号と唐津方面からの県道(県道245番枝去木-今村線)が合流し、値賀地区における交通の要点となっている。町立保育所ふたば園もある。

中通 世帯数五七戸、人口二九九人。

八ッ田川のほとんど台地表面上に近い浅い河谷の右岸にあり、東北側は、外津浦を臨む台地急崖となっている。南

隣りが仮立、北隣りが下宮である。当地方を支配した値賀伊勢守（元和元年一六一五死去）の墓があり、オタツチヨさまと呼ばれて土地の人に敬われている。国道204号が通っている。その国道沿いには唐津署値賀警察官駐在所、保育所さくら園もある。また医院、値賀郵便局もある。

下宮 世帯数四五戸、人口二二三人。

八ッ田川中流域の開けた河谷の左右両岸に位置する。八ッ田川（前田川）河谷は、旧値賀村地域のなかでは値賀川内地区とともにまとまった水田地となっている。八ッ田川左岸の台地上小丘には、旧村社の値賀神社（旧松尾権現）があるが、地籍では普恩寺地区になる。値賀小学校、上場農協値賀支所、真宗大谷派柴雲山唯蓮寺もある。

外津 世帯数三四四戸、人口八五二人。

世帯数では本町最多、人口では仮屋について多い。外津浦西南岸の上場台地がけ下の小平地に家屋が密集している漁業集落。外津漁業協同組合があり、佐賀県管理の第一種漁港で、沿岸・沖合漁業の基地。外津浦湾内でのハマチ、タイなどの養殖がさかん。県内外からの釣り客相手の観光漁業もさかん。北方正面に国道204号が通じる外津橋を仰ぐ。氏神淀姫神社がある。

普恩寺 世帯数八一戸、人口四〇八人。

集落は、上場台地が高度を低めてトリカ崎で玄界灘に落ちている台地面のゆるやかな西南側斜面（高度三〇〇〜四〇〇）に展開する。西方には、トリカ崎と池崎の間にごく小さな河谷があり水田地となっている。この地区の南部は高度八〇〇近くの台地面となり畑地である。その台地面の西側は、急崖（が）となって玄界灘に落ちている。地名は集落の東北台地面付近にある値賀氏の菩提寺であった曹洞宗石門山普恩寺に由来するといわれている。

値賀川内 世帯数五五戸、人口二九三人。

志礼川河谷沖積地右岸にあり西南に向いている。

この地は、中世は松浦党の一員値賀氏の所領だった。豊臣秀吉が朝鮮出兵の拠点とした名護屋築城の折、肥前国砥川村（小城郡牛津町）から徳永一族が石工として召しだされ、後にここに住んだ。以後一族は、唐津藩の石工として活躍したが、現在は石工の集落としての面影は少なく農業が中心である。北方台地には国指定特別史跡の長谷川秀一や木下利房の陣跡。未指定の毛利輝元、京極高次の陣跡がある。字宮迫には氏神白山神社がある。

平尾 世帯数四〇戸、人口一九一人。

八ッ田川（前田川）の谷頭が浅く広い浸食谷となって上場台地表面上に展開しているところに位置する。今村溜の西側と南側にあたり、町役場値賀出張所や値賀中学校がある。南側の字古野には天満神社がある。国道204号が通る。西側は、普恩寺地区からつづく台地面で畑地となり、その先はかなりの急崖で玄界灘に臨んでいる。

浜野浦 世帯数三九戸、人口二〇一人。

浜野浦下流河谷の右岸台地面（高さ五〇〇〜七〇〇）に展開しており、上場台地西縁部にあたる。北方の今村、平尾方面からきた国道204号が南の仮屋、新田方面へ通じている。字下川に大歳神社がある。

大藪 世帯数四〇戸、人口一九三人。

玄界灘を臨む上場台地西斜面に位置する。浜野浦から大藪、仮屋にかけての上場台地西縁を縫う国道204号は、この地域で道路幅が狭いうえに曲りくねって不便だったが、大幅な道路改良工事が進められて便利になった。集落付近に水田が少ない。地域内に大山祇神社、天満神社がある。

石田 世帯数五〇戸、人口二二一人。

石田川河谷左岸の上場台地西斜面高さ五〇〇〜八〇〇の間に展開している。集落はおおむね西向き。台地斜面



から石田川河谷にかけて水田が分布する。仮屋簡易郵便局もある。地区内津賀根にある三島には、旧村社の三島神社や五社神社、昭和五十四年に完成した町福祉センターがある。

仮屋 世帯数二二二戸、人口九二三人。

本町内集落中、世帯数は外津につき、人口は最大である。石田川下流右岸の小平地から天狗岳(標高一四五・九)東南がけ下にかけて密集する漁業集落で仮屋湾に臨む。仮屋漁港は、佐賀県管理の第一種漁港で、海岸保全区域指定港である。沿岸沖合漁業の基地で仮屋湾内でのハマチ、タイ、真珠養殖もさかん。とくにタイ養殖は、県下最大級を誇っている。釣り客相手の瀬渡し、釣り船などの観光漁業もさかん。仮屋小学校、仮屋漁業協同組合、験潮場などの公共施設もあり、地域内には厳島神社、金刀比羅神社、竜駒社、蛭子神社、真宗大谷派清水山極瑞寺などある。

花ノ木 世帯数一四戸、人口七六人。

有浦川右岸の上場台地面上(標高一六〇)に乘る集落。集落の北に、犬吠川支谷沿いの狭小な水田がみられるが、それを除いては水田はほとんどなく、畑地と樹園地(ミカン)などが中心である。

栄 世帯数二六戸、人口一〇一人。

花ノ木と同じく有浦川右岸に広く展開する上場台地面(第二項の地理区のところ)で設定した北部ブロック台地面)上に乗っており、そのほぼ中央に位置している。(標高およそ一六〇)

ここは、主に第二次世界大戦後に入植した開拓集落で、水田は少なく、花ノ木と同じく畑地、樹園地(ミカン)が多い。養鶏、肥育牛飼育もみられる。

#### ○旧有浦村地域

小加倉 世帯数四五戸、人口二一九人。

志礼川最上流部の鬼木川、下場川が上場台地面に浅い河谷となつてはいるのぼつた谷頭付近にあり、本町の北部ブロック台地面の東部に位置する(標高一〇〇―一二〇)南向きの集落。地域内を唐津方面と値賀方面(県道245号枝去木―今村線)を結ぶ県道が走っている。地域内に氏神小加神社がある。

有浦下 世帯数六五戸、人口三三三人。

有浦川支流の下村川、犬吠川沿いの河谷にあたる地域で、西南に向かって谷が開けている。白畑、犬吠などの集落がある。上村川との合流近くは谷がかなり広く開けており、まとまった水田が分布する。字前田に有浦神社、金刀比羅神社、国指定重要文化財の木造薬師瑠璃光如来座像のある曹洞宗瑞泉山東光寺、また有浦上地区と境界をなす丘陵高江山には、高江城跡がある。

有浦上 世帯数八七戸、人口四五二人。

有浦川支流の上村川の河谷とその右岸の北部ブロック台地東南部と、左岸の東部ブロック台地面からなる地域。上村川河谷は、東西につらなり比較的狭くて深い。台地面との比高が一〇〇から一二〇がある。右岸に畑迫、柚ノ木などの集落があり、唐津方面、諸浦方面へ通じる県道が通っている。

右岸の北部ブロック台地面(標高一四〇―一五〇)には石力石、左岸の東部ブロック台地面(標高一四〇―一五〇)には日の出松地区がある。日の出松地区の乗っている台地面は、台地面としてはかなり水田化されており、日の出松溜がある。字寺の上に曹洞宗有浦山常楽寺、字畑迫に熊野神社がある。

諸浦 世帯数一四四戸、人口六一一人。

有浦川と上村川が合流して西へ沖積地を形成している地域にある。東松浦半島としては最大級の平地となつて

いる。かつては仮屋湾の入江だったところである。世帯数や人口では外津、仮屋地区より少ないが、地理的位置では本町のほぼ中央部を占め、集落的機能からみても玄海町役場をはじめ有浦小学校、保育所みどり園、玄海郵便局、佐賀銀行有浦支店、上場農協有浦支所、医療機関、商店街などがあり、本町の中心的集落となっている。唐津方面、大良方面、値賀川内方面と、新田を経て仮屋方面、肥前町方面へと通じる本町の道路交通の要衝でもある。地域内に八幡神社、真言宗御室派御国山遍照寺がある。

新田 世帯数一〇八戸、人口四四三人。

有浦川下流から河口の沖積地にあり仮屋湾に臨む。初代唐津藩主寺沢志摩守広高が、諸浦地先の仮屋湾を干拓して開いたと伝える新田に出来た集落である。本地区は諸浦、長倉、有浦下地区と合せて有浦川中下流沖積地を形成し、本町内でも最もまとまって広く水田が分布している。新田地先は、さらに昭和四十年（一九六五）完成の県営干拓地がある。本地区に昭和四十九年（一九七四）開校の県立東松浦高等学校のほか有浦中学校、唐津署有浦警察官駐在所、特別養護老人ホーム玄海園、保育所わかば園、町民グラウンドがあり、県立東松浦高等学校は、唐津市内高校への遠距離通学に困っていた上場地域にとっては地域振興の基盤の一つともなった。

本地区は、東隣りの諸浦地区とともに本町の交通の要衝であり、唐津方面へ通じる県道と国道204号が金ノ手で合流、北上すれば仮屋、値賀地区を経て名護屋、呼子方面へ、南下すれば肥前町を経て伊万里方面へと達する。また金ノ手からは仮屋湾対岸の京泊、菖津に連絡する渡船もあった。当時はバスの時刻にあわせて日に四回運行していた。交通機関の発達で乗客が減り、船主の死亡もあって、廃業された。また地域内に綿積神社がある。

長倉 世帯数六六戸、人口二六六人。

有浦川本流が、藤平地区の狭い河谷からやや広い谷をつくって北西に展開する台地のすそにあり、集落はその

まま諸浦地区へとつながる。本町としては、最もまとまった水田がみられる地域の一つである。諸浦地区から本地区を通り、藤平を経て唐津市大良地区へと至る有浦川沿いの大良道が通じている。有浦川の支流舞川が宇野付で高さ六尺の小滝をつくっている。地区内に大山祇神社や金比羅神社がある。

轟木 世帯数三四戸、人口一六五人。

本町の南部ブロック台地に乗る集落（標高二〇〇〜一四〇）。有浦川支流の受付川が台地上につくった比較的浅い谷の兩岸に展開している。この谷を南東にのぼれば田代地区に至る。受付川は、ここから上場台地斜面を急流となりながら北へ流れ有浦川へ合流する。地域内に大山祇神社がある。

牟形 世帯数六四戸、人口三〇三人。

上場台地縁部のゆるやかな台地斜面と仮屋湾沿岸にかけて集落が分布する。松崎川、浦田川などの小河川が仮屋湾に注ぐ。牟形湾の入り江や玉子島を臨み、仮屋湾内でも景色のよいところ。集落南部には牟形トンネル（隧道「長さ八〇」）があり沿岸部を南北に国道204号が通っている。地域内には牟形小学校や旧村社の八幡神社と曹洞宗玉子山宝昌寺がある。

大島 世帯数九戸、人口四七人。

本町の南部ブロック台地面にあり、本町の最南東部に位置し、本町では最高点（標高二二〇）の集落。第二次世界大戦後の開拓集落で水田は少なく畑作、養蚕が中心。近くに野高山（標高二六〇・二）がある。

○旧切木村地域

藤平 世帯数一四戸、人口八九人。

旧切木村の大良地区の一部であった。有浦川中流の比較的狭くて深くなっている河谷の左岸にある。まとまっ



た平地はなく水田も少ない。玄海町長倉と唐津市大良を結ぶ大良道が通る。ここには唐津市大良地区にあるダムから取水した九州電力の有浦発電所（出力五〇・ワット）があり、字袖切川に大山祇神社がある。

田代 世帯数一八戸、人口九九人。

切木村の大良地区（現唐津市）の一部であった。有浦川支流の受付川の上流部のほぼ台地面に近い浅くて広い河谷の右岸にある（標高およそ一五〇）。台地面としてはまとまった水田が分布している。唐津市大良地区、玄海町轟木地区と隣り合っている。字田代田原に尾崎神社がある。

座川内 世帯数四四戸、人口二一三人。

座川（切木川）下流の河谷左岸に面している上場台地斜面に西北ないし西に向かって展開している（標高七〇〜九〇）。切木川の川筋沿いに旧有浦方面から湯野尾を経て肥前町切木方面と、南に台地面を上って肥前町仁田野へ至る通路となっている。西方は、切木川の支流古郷川の河谷を挟んで肥前町立石集落がある。座川内から湯野尾にかけては、「唐津石」または「切木石」とよばれる安山岩系、玄武岩系の石切り場が数カ所あり、石材業が立地している。地域内に大山祇神社と曹洞宗大慈山興福寺がある。

湯野尾 世帯数三〇戸、人口一三四人。

座川（切木川）中流の比較的ゆるやかな河谷の右岸にあり西南に向いている。座川沿いに東南へ行けば切木盆地に出る。座川はここから小滝、急流となって西北へ座川内方面へ流れ下る。地域内で肥前町仁田野尾地区からの金剛川を併せる。本町の最南部の集落で、大山祇神社がある。

以上、本町の主な集落を概観したが、本町には人口千人を越える大きな集落がない。立地分布では集落の多くが緩傾斜の台地斜面か河谷沿いにあり、台地上や岩石海岸の多い沿岸部は、集落が少なくなっている。

## 二 人口

### (一) 概観

本町の人口は昭和六十年十月一日の国勢調査によると男三、七八八八人、女三、八三五五人の合計七、六二三人、人口密度は一平方キにつき二二・九人で、全国平均の三二・〇四人、県平均の三六・一人を下回り県内では三八番目の密度。世帯数は一、七九四戸となっている。部落別人口表の昭和五十三年（第4表）と昭和六十年（第5表）をみてわかるように、わずかではあるがこの七年間で人口減少を示している。世帯数で見ると、全体の人口減が五十三人に対して一三四の増となっており、本町においても核家族化が進行していることがわかる。

集落別では、東松浦高等学校の新設や有浦中学校の移転などがあつた新田地区が一六一人増でもっとも多く、ついで外津の一〇四人、中通二九人、仮立二四人、浜野浦四人の増加が目だつ。その他昭和五十三年から六十年までの比較で人口増加があつた集落は、藤平、田代、栄、長倉である。

逆に人口が減少したところは、仮屋八六人を筆頭に有浦上四八人、座川内四四人、下宮四〇人が目だち、牟形、大藪、平尾、轟木、普恩寺、湯野尾、諸浦、花ノ木、値賀川内、有浦下、大島、小加倉となっている。

### (二) 人口の推移（人口動態）

合併以前の本町の人口は、昭和二十五年（二九五〇）には、旧値賀村五、〇二四人、旧有浦村三、五〇二人、後に合併した旧切木村の藤平、田代、座川内、湯野尾地区の約八〇〇人であった。

ところが昭和三十年代にはいつの間もなく始まったわが国の世界に例をみない、いわゆる「高度成長経済」は、

(表5) 国勢調査結果表

昭和60年10月1日現在

行政区	世帯	人口		
		男	女	合計
小加倉	45	104	115	219
有浦下	65	151	172	323
有浦上	87	224	228	452
長倉	66	135	131	266
諸浦	144	272	339	611
新田	108	207	236	443
牟形	64	151	152	303
轟木	34	80	85	165
大鳥	9	22	25	47
値賀川内	55	143	150	293
仮立	54	135	133	268
中通	57	150	149	299
下宮	45	105	118	223
外津	344	522	330	852
普恩寺	81	200	208	408
平尾	40	97	94	191
浜野浦	39	98	103	201
大藺	40	90	103	193
石田	50	119	112	231
花ノ木	14	34	42	76
仮屋	221	432	491	923
栄	26	54	47	101
座川内	44	105	108	213
湯野尾	30	65	69	134
田代	18	51	48	99
藤平	14	42	47	89
合計	1,794	3,788	3,835	7,623

(表4) 集落別人口調べ

昭和53年4月30日現在

行政区	世帯数	世帯人員		
		男	女	計
小加倉	47	104	116	220
有浦下	67	157	168	325
有浦上	95	245	255	500
長倉	61	136	129	265
諸浦	152	284	338	622
新田	69	130	152	282
牟形	65	168	167	335
轟木	37	97	93	190
大鳥	10	25	26	51
値賀川内	55	146	150	296
仮立	52	125	119	244
中通	50	130	140	270
下宮	50	120	143	263
外津	214	408	340	748
普恩寺	83	216	212	428
平尾	48	107	110	217
浜野浦	35	100	87	187
大藺	46	117	107	224
石田	44	122	109	231
花ノ木	16	42	41	83
仮屋	234	468	541	1,009
栄	24	56	43	99
座川内	46	134	123	257
湯野尾	29	72	78	150
田代	17	52	44	96
藤平	14	38	46	84
計	1,660	3,799	3,877	7,676



わが国の社会をあらゆる面にわたって大きく変化させることになった。

人口の面で見ると、第一次産業から第二次、第三次産業人口への移動があり、農山漁村から都市部への、とくに京浜、中京、阪神地区の太平洋ベルトへのはげしい人口流出であった。

もともと第一次産業を基幹とした佐賀県は、このはげしい社会的人口移動、いわゆる過疎化現象に大きくみまわれることになった。その過疎県佐賀県のなかにも、背振山地地域と並んで、東松浦半島<sup>11</sup>上場台地地域は、過疎化現象がはげしいところになった。日本全国を覆ったこの人口移動による過疎化、過密化現象は、昭和五十年代に入ってようやく鈍化した。

この間の自然的増減をはるかに上回る社会的人口増減（本県の場合は社会的人口減少）の動きを、県、佐賀市、唐津市、東松浦郡およびその町村別に比較しながらみてみると、第6表のようになる。

昭和三十年の人口ピーク時に九七万三、七四九人を示した佐賀県人口は、「高度成長経済」期には人口流出<sup>12</sup>過疎県に転じ、昭和五十年の八三万七、六七四人まで、実に一三万五、〇〇〇人の人口減となった。この間の自然的人口動態（出生数と死亡数の差）では、毎年五、〇〇〇人から七、〇〇〇人の自然増加を示しているのであるから、「高度成長経済」期における本県の人口流出がいかに大きかったかがわかる。わが国を襲った過疎、過密の嵐も昭和四十八年（一九七三）第四次中東戦争による、第一次石油危機（オイルショック）の到来で世界経済が「低成長時代」を迎えるにおよび、やっと鎮静化に向かい、Uターン現象なども起こって過疎化現象にブレーキがかかった。

本県の人口も、昭和五十年以降はわずかながら人口増に転じ昭和六十年の人口は、八八万〇〇一三人を示している。この間の人口の動きを、市町村合併ブームが一段落ついた昭和三十年以降について追ってみる。

本町が所屬する東松浦郡は、本県内でも過疎のもっともはげしかったところである。これは、高度成長経済による一般的な人口流出のほかに、郡内に産炭地があり、石炭から石油へのエネルギー革命による産炭地の人口減が、拍車をかけたからである。

昭和三十年に一一万三、九四九人あった東松浦郡の人口は、昭和五十年には実に三八%減の七万七五五人に落ち込んだ。これは、減少比率、減少数ともに県下都市の中で最大である。昭和五十年以降は、若干の増加に転じたものの昭和五十五年と昭和六十年比では、ふたたび減少を示しており、本地域では過疎化現象が完全にとまったとはいえない状態である。

本町の人口推移は、今までみてきた県や東松浦郡の推移と基本的に同じ過程をたどってきている。しかし過疎化現象のはげしかった東松浦郡のなかでは、産炭地のあった厳木町、相知町、北波多村、肥前町、離島のある呼子町、鎮西町、山村の七山村と比較すると、浜玉町とともに本町はその増減程度がやや低い。

合併直前の昭和三十年に九、三五九人あった本町の人口は、昭和六十年国勢調査で七、六二三人となった。とくに、昭和五十五年郡内の他の町村の多くが依然として人口減少が続いているのにたいし、本町と北波多村が五十年以降いくらでも人口増になったのが注目される。

本町の場合は、九州初の九州電力玄海原子力発電所や県立東松浦高等学校の誘致新設などが影響したと思われるが、本町の積極的な町づくり政策が、人口の面でも安定化し、これから飛躍しようとする本町にとっては明るい展望になっているとみてよい。

自然的増減（出生と死亡の差）からみた人口の動きは、一四世紀におけるヨーロッパの黒死病（ペスト）の大流行による人口減のように、特別な疫病とか戦争などの影響がないかぎり増加を示すのがふつうである。

(表6-2)

(右ページより続く)

市町村	昭和45年			昭和50年		
	計	男	女	計	男	女
佐賀県	838,468	393,631	444,837	837,674	394,661	443,013
市部	424,254	198,567	225,687			
郡部	414,214	195,064	219,150			
佐賀市	143,454	66,982	76,472	152,258	71,357	80,901
唐津市	74,233	34,564	39,669	75,224	35,002	40,222
東松浦郡	74,406	35,105	39,301	70,775	33,467	37,308
浜玉町	10,624	5,031	5,593	10,363	4,936	5,427
七山村	3,808	1,808	2,000	3,438	1,652	1,786
厳木町	8,647	3,979	4,668	7,951	3,687	4,264
相知町	11,106	5,170	5,936	10,621	4,949	5,672
北波多村	4,299	2,015	2,284	4,174	1,934	2,240
肥前町	11,806	5,719	6,087	11,093	5,312	5,781
玄海町	<b>7,468</b>	<b>3,545</b>	<b>3,923</b>	<b>7,427</b>	<b>3,592</b>	<b>3,835</b>
鎮西町	8,944	4,214	4,730	8,645	4,128	4,517
呼子町	7,704	3,624	4,080	7,063	3,277	3,786

市町村	昭和55年				昭和60年			
	世帯数	人口			世帯数	人口		
		総数	男	女		総数	男	女
総(県)数	233,117	865,574	410,912	454,662	242,619	880,013	417,308	462,705
佐賀市	51,552	163,765	77,502	86,263	54,231	54,231	79,633	88,619
唐津市	22,828	77,710	36,419	41,291	15,480	23,405	36,765	41,979
東松浦郡	17,940	71,977	34,592	37,385	18,209	70,936	34,131	36,805
浜玉町	2,404	10,474	4,995	5,479	2,448	10,391	4,947	5,444
七山村	657	3,360	1,621	1,739	645	3,221	1,553	1,668
厳木町	2,540	8,056	3,897	4,159	2,562	7,665	3,776	3,889
相知町	2,748	10,492	4,932	5,560	2,745	10,280	4,790	5,490
北波多村	1,342	5,021	2,380	2,641	1,411	5,257	2,478	2,779
肥前町	2,557	11,118	5,387	5,731	2,565	10,960	5,352	5,608
玄海町	<b>1,659</b>	<b>7,463</b>	<b>3,704</b>	<b>3,759</b>	<b>1,794</b>	<b>7,623</b>	<b>3,788</b>	<b>3,835</b>
鎮西町	2,045	8,626	4,158	4,468	2,061	8,318	4,017	4,301
呼子町	1,988	7,367	3,518	3,849	1,978	7,221	3,430	3,791
市部					135,625	460,177	217,348	242,829
郡部					419,836	419,836	199,960	219,876

(昭和60年度国勢調査結果による)

(表6-1) 市町村人口推移

(佐賀県政史・佐賀県統計年鑑より)

市町村	昭和22年			昭和25年		
	計	男	女	計	男	女
佐賀県	917,797	439,481	478,316	945,082	455,824	489,258
佐賀市	64,978	30,086	34,892	66,807	31,251	35,556
唐津市	49,668	23,331	26,337	51,820	24,324	27,496
東松浦郡	126,167	61,398	64,769	133,099	65,169	67,930
鏡村	5,442	2,575	2,867	6,513	3,116	3,397
浜崎町	6,716	3,128	3,588	6,713	3,143	3,570
玉島村	5,834	2,768	3,066	5,867	2,818	3,049
七山村	4,894	2,363	2,531	5,091	2,478	2,613
厳木村	16,583	8,408	8,175	18,648	9,468	9,180
相知町	12,377	5,882	6,495	15,913	7,675	8,238
久里村	4,951	2,422	2,529	1,583	789	794
鬼塚村	5,916	2,845	3,071	5,925	2,867	3,058
北波多村	9,625	4,716	4,909	10,041	4,948	5,093
切木村	4,973	2,389	2,584	5,352	2,584	2,768
入野村	14,288	7,140	7,148	15,260	7,675	7,585
有浦村	<b>3,345</b>	<b>1,621</b>	<b>1,724</b>	<b>3,502</b>	<b>1,729</b>	<b>1,773</b>
値賀村	<b>4,765</b>	<b>2,315</b>	<b>2,450</b>	<b>5,024</b>	<b>2,488</b>	<b>2,536</b>
名護屋村	6,692	3,224	3,468	7,211	3,533	3,678
呼子町	9,718	4,768	4,950	9,867	4,718	5,149
湊村	6,168	2,942	3,226	6,455	3,100	3,355
打上村	3,880	1,892	1,988	4,134	2,040	2,094

市町村	昭和30年			昭和35年		
	計	男	女	計	男	女
佐賀県	973,749	470,437	503,312	942,874	448,797	494,077
市部	454,416	218,412	236,004	451,548	214,067	237,481
郡部	519,333	252,025	267,308	491,326	234,730	256,596
佐賀市	126,432	60,658	65,774	129,888	61,215	68,673
唐津市	78,347	37,379	40,968	77,825	36,649	41,176
東松浦郡	113,949	55,982	57,957	104,993	50,916	54,077
浜玉町	12,842	6,093	6,749	12,281	5,740	6,541
七山村	5,213	2,561	2,652	4,862	2,305	2,557
厳木町	19,350	9,759	9,591	18,370	9,079	9,291
相知町	16,647	8,107	8,540	16,524	7,977	8,547
北波多村	10,808	5,416	5,392	8,642	4,280	4,362
肥前町	11,415	8,536	8,879	14,576	7,094	7,482
玄海町	<b>9,359</b>	<b>4,589</b>	<b>4,760</b>	<b>8,952</b>	<b>4,384</b>	<b>4,568</b>
鎮西町	11,982	5,931	6,051	11,178	5,450	5,728
呼子町	10,333	4,990	5,343	9,608	4,607	5,001



本県や本町も、自然増加を示しているが(第7表参照)、昭和五十八年の全国平均の出生率は千分率(以下同)で一二・七、死亡率六・二、自然増加率六・五と比較すると本町の場合、つぎのようなことがいえる。出生率では、一四・八で全国より二高いが、死亡率も一〇・八で四・六も高く、したがって自然増加率は、四・〇となり全国平均より二・五低くなっている。この傾向は、本町だけではなく郡内各町村についてもいえることで、とくに全国的平均より死亡率がかなり高いことは問題である。いわば多産多死型の傾向であり、このタイプは少産少死型に比較して、不必要な社会負担を強いられるともいえる。

昭和三十五年から五十年までの本県や本町の自然的増減をみると、現在より自然増加率が一般的に大きい。にもかかわらず人口減少を示したことは、この間の人口流出がはげしかったことを物語っている。

### (三) 人口構成

わが国の就業人口の産業別人口構成は、わが国が高度工業社会へ移行したことによって第二次世界大戦後、大きく変化した。第一次産業人口が激減して第二次、第三次産業へ移行し、とくに第三次産業人口が最大を示す工業先進国型となったのである。

本県の産業別人口構成も第二次世界大戦前と比較すれば、第一次産業人口が大幅に減少したが、なお二〇%近くを示す。これは、他県と比較すると高く、農業を基幹とする農業県佐賀の性格をあらわしている。

本町の場合も同様なことはいえるが、第一次産業への依存度がいちだんと高くなっている。昭和五十五年で、本町の農家八〇四戸のうち専業農家一〇七戸、兼業農家六九七戸である。さらに兼業農家の内訳は、第一種兼業農家二七五戸、第二種兼業農家四二二戸で、第二種兼業農家が全体の五二・五%を占めている。農業を中

(表7) 人口動態

佐賀県統計年鑑より

年次 市町村	出生 数	死亡 数		自然 増加	婚姻 件数	離婚 件数	出生率 (人口千分)	死亡率 (人口千分)	婚姻率 (人口千分)	離婚率 (人口千分)
		うち男	うち女							
昭和54年	12754	6602	6414	3400	6340	5483	14.9	7.5	6.4	0.93
55	12466	6455	6873	3534	5593	5511	14.4	8.0	6.4	0.99
56	11948	6076	6724	3627	5224	5506	13.8	7.8	6.4	1.11
57	12163	6258	6603	3512	5560	5629	14.0	7.6	6.5	1.31
58	11976	6170	6922	3671	5054	5383	13.7	7.9	6.2	1.34
市部	6391	3319	3359	1773	3032	2855	14.0	7.3	6.2	1.57
郡部	5585	2851	3563	1898	2022	2528	13.4	8.5	6.1	1.08
市部	2293	1173	1047	547	1246	1026	13.7	6.2	6.1	1.69
市部	1109	602	598	312	511	506	14.2	7.7	6.5	2.05
市部	953	463	675	366	278	459	13.4	9.5	6.4	1.47
市部	148	75	85	44	63	61	14.3	8.2	5.9	1.94
市部	55	29	31	18	24	23	16.8	9.5	7.0	0.61
市部	91	50	80	45	11	51	11.7	10.3	6.5	1.41
市部	125	57	94	51	31	63	12.0	9.0	6.0	2.11
市部	58	32	57	23	1	29	11.0	10.8	5.5	2.65
市部	159	66	96	44	63	84	14.4	8.7	7.6	1.27
市部	111	50	81	51	30	39	14.8	10.8	5.2	1.07
市部	109	60	76	43	33	56	13.0	9.0	6.7	1.07
市部	97	44	75	47	22	53	13.3	10.3	7.3	0.69

(0/100=パーセント……千人につき)

心産業とする本町でも第二種兼業農家が多いことは、高度工業化社会へ到達したわが国の実態を反映しているといつてよい。

全国ではすでに、第一次産業人口が一〇%を割り、現在のようない工業化政策が続くかぎり、より以上にこの傾向は続くものと思われる。おそらく最終的には、イギリスやアメリカ合衆国なみに5%を割ることになると予想される。このため、第一次産業に基盤を置く本県や本町であっても、その影響を受けて第一次産業人口が現在の本県の二〇%台、本町四〇%台からかなり減少していくであろう。また、第二種兼業農家はまだまだ増加し、逆に専業農家は、さらに減少するものと思われる。

わが国の人口は、江戸時代は多産多死型で人口増加はあまりなかった。明治になって産業革命を迎え近代国家の仲間入りをするに人口が急激にふえ始めた。明治当初三千万人弱であった総人口が昭和十年（一九三五）には六千九百万人、昭和五十五年（一九八〇）には一億一千七百万人となった。出生率があまり下がらなかつたのにたいし、死亡率がかなり下がったため多産少死型の傾向となり、百年間に約四倍の人口増をみたのである。しかし、昭和三十五年（一九六〇）以後の高度成長経済期を迎えると、出生率や死亡率の上にも大きな変化が起こった。

第二次世界大戦後、海外からの復員や引き揚げ、また出生ブームが起こり、人口増加は大きくなった。しかし、戦後の復興が成り、わが国の工業が高度に進展しはじめると、人口の増加は逆に鎮静化した。出生率、死亡率ともに昭和三十五年（一九六〇）後から急激に低下しはじめ少産少死型へと変化した。

幼年人口の割合が下がり、老年人口の割合がふえ、平均寿命も伸び（今や世界一）、人口増加も鈍化した。この点でも先進国型へと移行したというものの本町の年齢別人口構成（第8表参照）では幼年人口の割合がやや高い。四十歳前後が少ないのは、ちょうどその年代が「高度経済成長」の最盛期で、農村部から都市部へと人口流出がもつともはげしかったところである。とくに女子が、集団就職で中京、阪神の繊維工業を中心にどんどん出ていった時代であった。男子の流出が女子よりやや少ないのは、農業後継者として女子よりは、踏みとどまったためと思われる。戸数と人口推移のところでもみたように、本町にも核家族化の波が押し寄せているが、いっぽうでは、わが国は高齢化社会を迎えつつある。六十五歳以上の老人は、昭和五十九年で本町でも人口の一二%を占めているが、高齢化社会のピーク時では、総人口の四分の一になると予想されている。ちょうど現在の倍になるわけだが、町人口の急激な増加が考えられないまま、総人口が横ばい状態のなかで、核家族化時代と高齢化社会を本町も迎えようとしている。

主な参考文献

- 『自然地理学Ⅰ』（福井英一 他著、朝倉書店） ◆ 『自然地理学Ⅱ』（西村嘉助 他著、朝倉書店） ◆ 『詳説 新地理』（正井泰夫 他著、二宮書店） ◆ 『日本国勢図会』（一九八五年版、国勢社） ◆ 『日本のお天気』（気象庁 天気相談所、大蔵省） ◆ 『日本の民俗 佐賀』（市場直次郎著、第一法規） ◆ 『日本の活断層（活断層研究会、東京

第8表 玄海町年令別性別人口構成（1984）  
（県統計年鑑より作成）

